



Love Go!  
みれ♡パラ



ADULT ONLY

こねこはうす〜

「お待たせ〜♪  
あれ、どうしたのみれいちゃん  
もしかして…  
少し遅れて来たから怒ってる?」

「別に…気にしてないわ……」

「そっか、良かった♥」

「それにしてもみれいちゃん  
いつもの制服姿もいいけど  
その服もすつごく似合ってるね♪」

「そ、そう……」

彼女の名前は、南みれい。  
ボクと同じ私立パプリカ学園の生徒で  
風紀委員長を務めている。

そして今日はみれいちゃんとの初デート♪  
遊園地に行つて…映画を観て…最後はもちろん…ムラフ ♡

えっ、どうしてキモオタのボクが  
こんな美少女と付き合っているのかつて？

デヘヘヘ ♡

それは二週間前の運命的な出会いからなんだなあ♪



「おはよう〜!」おんま〜す、委員長〜!」



「おはよう、真中さん」

「パプリカ学園校則第84条  
廊下を歩く時は壁に沿って右側を歩く事」

「きちんと守れているようね」

「は〜い〜!」



「その男子、止まらなさいー!」



「今日はパルるんのファイギュアの発売日なんだなあ♪」

キラーン



「♪パルるん♪パルるん♪パルるん♪パルるん♪パルるん♪」

「校則違反です！」

「違反チケットを切ります！」

「えっ…ええっ！  
どうしてボクが？  
何もしてないのに！」



「私立パプリカ学園校則

第2674条

廊下で鼻歌を歌ってはならない！  
校則違反チケツト！」

（バシィー！）

「そ、そんなの…  
知らないんだなあ」

「言い訳は聞かないわ！」

「ひっ！」（ビクッ）

「す、すみません…です」

「ぞ、わかればいいのよ。これからばあさまをうけなさい」

突然理不尽な違反チケットを切られ  
ボクは怒りを覚えるどころか…逆に  
天使の様な微笑みに心奪われてしまう。

今まで二次元美少女にしか  
興味を抱かなかつたこのボクが  
リアル女子に恋してしまうなんて…

これはきつと神様が引き合わせてくれたに違いない！  
ボクの子種を受け止めてくれる運命の天使に♡





とはいえ……ボクみたいなキモオタが南委員長と常識的に考えて付き合えるわけがない。だからボクは彼女に付け入る隙を探るために調査を始めた。放課後ボクに尾行されているとも知らず南委員長は一人繁華街の方へ向かっていた。南委員長がパラ宿にいったい何の用があるんだ？



「委員長~~~~」

「待ってたよ〜」

ん、誰かと待ち合わせか……

「ごめんなさい  
風紀委員の仕事の片付けに手間取っちゃって」

あれは学部の生徒と…  
もう一人はたしか…  
学園で人気のスーパースターアイドル  
そひいじゃないか!?

「気にしてないから大丈夫」

「クマさんは怒ってるかもね♪」

妙な組み合わせだな。一体どこに行くつもりだ？  
ん、ショップに入っただけ…  
って、「ム」は!!



「プリズムストーンへようこそ♪」

まっ、まさか、あの…  
真面目な南委員長が  
プリパラをしていたなんて！

「ゴラーツ！  
何してたクママ！」

「やっぱり怒ってるおクママさん♪」

「そうみたいね、クスクス♪」

「何が可笑しいクママ！  
早く準備するクママッ！」



「うんー!」



「かっ!」



「ぎ、今日も気合入れていくわよー!」

「お友達のとモチケもスキャンできるよ!」



「コーデの数だけモチケをスキャンしてね」

「プリパラチェンジ完了ぷりっ♡」



「コーデチェンジスタート!」



南委員長がソラミスマイルのみれいちやんだったなんて…

とんでもない秘密を握っちゃったぞ♪

これで南委員長を……フビフビフビッ♡  
ボクの彼女(モノ)にできるんだなあ♪



〜数日後の昼休み〜

「私を屋上なんか呼び出していったい何の用かしら？  
あなたは確か…C組の秋葉君よね」

「光栄だなあ南委員長に名前を覚えて貰えたなんて」

「勘違いしないで、別にあなたただけじゃないわ。」

「一度でも違反チケットを切った生徒の顔は忘れない主義なの」



「へえ〜凄い記憶力なんだ、ボクなんて同じクラスの……」

「あなたと雑談をしに来たわけじゃないの！」

「独り言なら用件を済ませてから勝手にやっつてちょうだい」

「手厳しいな、でもこれを見てもそんな態度でいられるかな？」

ボクはスマホを取り出し、南委員長に向けて動画を再生した。





「これから応援、ヨロシクぷりっ♪」



「ポップステップ げっちゅ〜♡」

「みんなのアイドル、みれいぷりっ」

「なつ……!!」

「これ昨日のプリパラライブを撮った映像だよ」

「まさかソラミスマイルのみれいちちゃんが  
うちの学園の風紀委員長だったとはね?」

「だから……?  
それがどうしたっていうの?!?」



「みんなに正体がバレたら困った事になるんじゃないかな？  
でも…南委員長がどうして言ったって言うのなら  
秘密にしてあげてもいいんだよ？」

「私はバレたって何も困らないわ。」

「だっていざれ大々的に発表するつもりだったんだから。  
私を脅すつもりならとんだ的外れね」

「じゃあ大神田校長にバラしてもいいんだ？」



「あなた馬鹿なの？私は学部だから  
プリパラをしても何の問題も無いのよ!？」

「でも、あらあちゃん学部だったよね？」

「!!」(まさか…あららの正体まで)

「これでソラミスマイルも見納めか…  
あらあちゃんが抜けたら解散するしかないもんね？」

「せっかかく3人で神アイドル目指して  
頑張ってきたのに…残念だったね？」

ヒヒツ、効いてる効いてる♪  
あと、もうひと押しだな。

「でも…一番可愛そうなのは  
らあらちゃんだよ。  
本人は何も悪くないのに  
南委員長の子でプリパラに  
行けなくなるんだから」



「ど、どうしたらいいの……  
私は何をすれば黙っててくれるの?」

「フヒツツ」  
「ようやく自分の立場が理解できたみたいだね?」

「まあ、そんな無茶な要求はしないよ」

ぞくぞく

「ただ……  
南委員長が、ボクの彼女になってくれるだけでいいんだ♥」

「じよ、冗談でしょ!?  
そんな要求のめるわけないじゃない!」

「じゃあ期限付きならどう?」

「たった一年間ボクの彼女になるだけで  
南委員長秘密が守れるんだよ。  
容易い事じゃないか?」

「二年なんて……長すぎるわ」

「うーん……じゃあ半年にまけてあげるよ」

「……………わかったわ」

「デヘヘ♥これで恋人契約成立だね?」

〜同日 放課後〜

「さあ入って、みれいちゃん。

ここがボクの所属してるア二研の部室だよ♪」

「どうして私をここに……?」

「だって二人で居るところを誰かに見られて

ボク達が付き合ってるなんて噂を流されたら

みれいちゃんが困るだろ? ボクは一向に構わないけど♪」

「他の…部員は?」

「もうみんな帰ったよ。つまり…」

ここで何をしたらって、誰の邪魔も入らないってわけ、ムフフツツ♥」

「あなたまさか…  
破廉恥なこと考えてるんじゃないでしょうね!?!  
もし変な事したら…!!」

「アハハ、誤解しないでよ♪  
いきなりボクが襲いかかるとでも思ったの?  
今日付き合ひ始めたばかりなのに  
そんなテリカシの無い真似はしないよ〜」

「え! わ、私ったら…  
うっかり失礼な事言っちゃって…!!」

「もし、傷ついたなら謝るわ…!!  
ごめんなさい」



「いいよ、いいよ♪  
別に気にしてないから」

「ボクだつて一応、普通の恋人同士みたいにな  
ちやんと段階を踏んで愛を深め合つてから  
セックスしたいからね♥」

「ひっ……!!」

「何よりみれいちやんの大切な**バーズン**を  
こんなところで奪うなんて……もつてのほかさー!」

「ちや〜んとプランも立ててあるんだよ?  
初デートした帰りに、**ラブホ**にお泊りして  
朝までぶっ通しで**セックス**しまくるんだ!!」

「イヤああ……」

「きつと二人の一生忘れられない  
思い出になると思うよ♥」

「だから今日は**セックス**は我慢して……  
キスだけにするね?」



「あれれ〜どうしちやっただのみれいちちゃん？  
なんだか不安そうな顔して…」

「……………」



「ボクとチュ〜するのが怖いのか？  
それとも初めてで戸惑ってるだけかなあ？」

「…ま、どんな理由だろうと  
キスは絶対にしてもらおうよ？」

「だってみれいちゃんはそれなりの覚悟を決めて  
ボクと恋人契約を結んだんだろ?」

「……………!」

「そんな怖い顔で睨まないでよ、みれいちゃん?  
ボク達恋人同士なんだからさあ♥ヒビヒツ」



「そうそう♪目を閉じて、じっとしてるんだよ?」

「ハア、ハア、ハア…」

「す、好きだよ…みれいちゃん♥」

プチユツ

「うっ……ん……んっ……」

「みれいちゃんの唇って柔らかいね♥」

チュプ……チュパ……ピチャ

「舌を挿れるから口を開けて?」

(いやああ……)

クチャ……クチュツ

「んむっ……んっ……」

「みれいちゃんの唾液の味……ウヒヒツッ」

フチュウーッ

「むぐっ！うっ…んっ!!」

ピクッガクカクッ



ジュルル…チュル、チュル……

「フムッ、フムッ」

「悪いのはそつちじゃない!?  
あんな強引に舌を入れてくるなんて!」

「イテテテ…ひどいよみれいちちゃん  
いきなり突き飛ばすなんて」

ドンッ

「いやあーっ!!」

「やっぱりみれいちゃんに  
濃厚デュープキスは  
まだ早かったかな？」

「……え？」

「あれ、もしかして  
デュープキスも知らないの？  
頭良くてもしっかり系は  
てんで疎いんだね♪」

「ま、ボクと付き合ってれば  
おいおいわかってくるよ♪  
じゃあキスはまただして…  
パンツ見せてよ？」

「!!」

「みれいちゃんがどんなおぼんちゆ穿いてるか  
見てみたかったんだあ♥」



「ラビヒツ  
これが何度も妄想した  
みれいちやんの生パンかあ〜♥」

「デヘッ、デヘッ、デヘッ」

「……………」

（こんなグッズに…ショーツを見られるくらい  
別に…どおって事ないんだから）

「うーん、影になってよく見えないなあ。悪いけどみれらちやん…。」  
「もっとなくし上げねばいらんぞしよ!!」

「違うよ、もういつそスカートを脱いじやつてよっ?」

「なっ…何言ってるのよ!!」

「もうパンツ丸出しなんだし  
スカート脱いだって恥ずかしさは  
同じなんじゃないの?」

スルツ…スルル……パサツ

「うん。  
それでいいよ、みれいちゃん」

「うほほっ！  
みれいちゃんって細身のわりに  
結構デカ尻だったんだあ？」

「……く！」

「ムフフ♥  
撫で回したくなるような  
きやわいいプリケツだね♪」

「割れ目の食い込み具合も堪らないんだなあ〜♥」



「やっぱり純白パンツは最高だね♪」

「ハア…ハア…ハア…」



「手を後ろに組んだままじっとしてゐるんだよね。」

〜三十分後〜

「もう満足したでしょ！  
いつまで眺めれば気が済むのよ!?!」

「フヒツ♪  
パンツ丸出しで怒ったみれいちゃんも  
可愛いなあ〜♥」

「からかわないで!」

「わかったよみれいちゃん。  
じゃあ最後に……」

「上着も脱いで下着姿になれですって!？」

「やっぱりあなた…  
変な事しようと思ってるんでしょ!!」

「絶対に触ったりしないよ、見るだけって約束するからさあ」

「……………」

「ねえ、いいでしょみれいちゃん?」

「……………仕方ないわ。でも…………これが最後なんだから」



「うほほっ♪  
いいよみれいちちゃん  
とつても綺麗だよ！」

「上下お揃いの  
パンティーとブラも  
凄く似合ってるね♥」

「みれいちちゃんって結構胸あるんだ♪  
参考までにサイズ教えてよ?」

「知らないわ!  
測った事もないし  
気にもしてないから...」

「そっか...  
じゃあさブラジャーは  
何カップ着けてるの?」

「.....Bよ」

「へえ〜みれいちちゃんの  
オツパイはBカップなんだ。  
貧乳でも巨乳でもない  
程よい大きさだね♪」





「じやあ、みれいちちゃんの下着姿。  
じつくり堪能させて貰うね?」

「……………」

「スア…スア…スア…」

「ムク…ムク…」

「キョツと締まった腰のくびれ…」

「腰からお尻にかけての  
ボディライン…」

「どの角度から見ても  
完璧なんだなあ…」

「やつぱりこの体型を  
維持するのに運動や食事にも  
気を使ってるのかな？」

「当然でしょ！」

「全て計算しているわ…」

「さすがアイドルだね♪」

「じゃあ今度は  
お尻を見たいから  
後ろを向いてくれる？」

「ハア…ハア……」

「このムツチリした肉感…  
お尻に食い込んだおぼんちゅ…  
まさに至高の桃尻なんだなあ♥」

「へへへ…ジュルル」

クンッ

クンクン…

「んんんんん」

「ちゅ、ちゅー！  
ちゅーちゅーのちゅー！」



「へへへ、そんなに怒らないですよ。  
ちよつとニオイを嗅いだだけじゃないか？」

「女の子のお尻のニオイを嗅ぐなんて…最低っ！  
大体、見るだけって言うてたじゃない!？」

「いめんいめん…つい我慢出来なくなつて」

「それより、お尻突き出してくれないかな？  
もつとじっくりみれいちゃんのプリケツを堪能したいんだ♪」

「だ、誰がそんな…!」

「聞いてくれるよね、彼氏のお願いなんだからさっ?」

「デキッ  
デキッ  
デキッ  
デキッ  
デキッ」

「すごくいい眺めだよ  
みれいちゃん♥」



「アハハハ」

カシヤ  
カシヤ



「やっ！何してるのよ!?!」

「心配しなくても  
大丈夫だよ♪  
撮ってるのは  
局部だけだから」

「ニヒヒッ  
もう一枚と♪」

カシヤ

「さて、次はどんなポーズで  
撮ろうかなあ〜?」

「いやあ……」





「そうそう  
テーブルの上に乗って」

「股を開いて座ってくれる?」  
ガクガクツ

「うん……」

カパア……

「もっと開けるだろ?」

ガバツ

「うん、それくらいかな♪」

「……」

「じゃあ  
みれいちゃんのアソコを  
いっぱい写メで撮るけど……」

「顔は撮らないから  
万一流れても  
絶対みれいちゃんだつて  
バレないからね♪」

カシヤ カシヤ

カシヤ カシヤ

「ムフフツ…  
この薄い布一枚の下に…  
みれいちやんのカワイイ  
オマシコが隠れてるんだね♥」

「……」

カシヤ カシヤ カシヤ



「でも、どんなに隠しても…」

カシヤ



「パンツの上からクツキリと…」

カシヤ

「オマンコの形が分かるね？」

カシヤ

「いやあ…」

ブルブルブルツツ…

カシヤ



カシヤ



カシヤ





カシヤ



カシヤ

MENU



「さてとど…そろそろ  
下着も脱いじやおつか？」

「どうして…!?  
これが最後って  
言ったじゃない!？」

「ここまで脱いだんだから  
勿体ぶらずに  
最後まで見せてよ?」

「嫌よ、そんなの…!」

「どうせセックスする時は  
みれいちゃんのあるまの姿(全裸)を  
ボクに晒さなきゃならないんだよ?」



「大ききや形も  
申し分無いし…!」

「ハア、ハア、ハア…  
これがみれいちゃんのもの  
Bカップオツパイかあ〜♪」



「乳輪はややぷっくり膨らんで  
色は薄いピンク色…!」

「やつ…そんな近くで見ないでっ!」

ぽんぽんぽん



「美少女フィギュアでも  
こんな完璧なオツパイは滅多に無いよ!」



「だから、局部のアップしか撮らないから誰かは特定されないって言ってるじゃないか？ボクがそんなに信用出来ないの？」

「イヤッ！写真はやめて!!」



「デスッッッ」

「そうそう  
邪魔な手は後ろに組んで  
じつとしてるんだよ?」

カシヤ  
カシヤ



「顔は絶対に写さないって約束するから  
安心して♪」

カシヤ



カシヤ  
カシヤ



「みれいちゃん。  
少し角度変えてくれる？  
横乳も撮りたいんだ♪」

「……………」

んーい

「あ、今オツパイが揺れたよ♪  
プリンみたいにぷるんって♥」

カシヤ カシヤ

「じゃあみれいちゃん。最後の一枚も脱いで？」

「.....」

(やっぱり.....できない)

「どうしたの、みれいちゃん？」

「...脱がないと、ソラミスマイルは解散だよ？」

「らあちゃんにはプリチケを没収されて二度とプリパラに行けなくなっちゃうんだよ？」



「んんんんん〜」

「んんん〜」

スツ…

んんん

「んんん〜」

んんん

んんん

スルル…

「ハア…ハア  
これが憧れの…ゴクツ  
みれいちちゃんのオマシゴか…」

「んんん…」

「グヘツッ、グヘツッ…」





「じゃあ近くから、じっくり見せてもらおうね。」

「ハア…ハア…ハア…」



「まだ産毛も生えてない、ツルツルだったんだ♪」



「すごくカワイイよ？  
みれいちゃんのパイパンマン♡」



「みれいちちゃん  
またさっきのポーズやっつけてよ♡」

「えっ……!?」

「お尻を突き出した  
ポーズだよ?」

「!!」(やああ……)

「ほら、はやくはやく  
お尻突き出してよ  
みれいちちゃん♡」



「ウホホ♪  
マンコもアナルも丸見えだあ♥」

「み…見ないで」

「ダメダメ  
マンスジから肛門のシワまで  
じっくり見せてもらおうよ?」





「おっ…おっ…ズシッから写真撮られちゃうぞっ…」

「みれいちゃん  
もう一度テーブルに  
上がってくれる?」

プル

プル



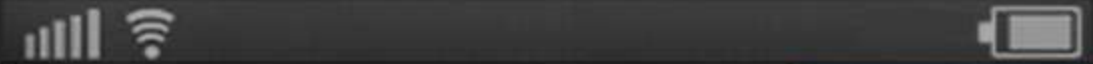
〜二十分後〜

カシヤ  
カシヤ

「そうそう  
さつきみたいにしつかり  
股を開くんだよ?」

「.....」





カシヤ  
カシヤ

「ビビビツ」(顔もね♪)

カシヤ



MENU



「なにより  
オツパイとおまんことお尻の穴を同時に(ラレームに入れて)撮れるもんね♪」



「デヘヘツ♥やっぱりのポーズは最高だね！眺めは良いし…」



「グドグドッ...」

カシヤ カシヤ

カシヤ

「それにしても滑稽だよかね？」

「え…!？」

「だって普段あんなに厳しく  
風紀を取り締まってる  
南委員長が」

「こんなエロポーズで  
マンコと肛門まで晒して  
エロ写メ撮ってるんだよ？  
生徒達が見たら  
どう思うだろうかね？」



「無理矢理やらせてるのは、あなたじゃない！」

「よくもぬけぬけど、そんな事が言えるわね!!」

「その顔、その顔♪」

「やつといつもの凛とした  
みれいちゃん表情に戻ったね？」

ニイツ

「なっ、何を言ってるのよ……?!」



「だつてみれいちちゃん  
さつきからずつと涙を浮かべて  
らしくない表情してたから……」

「わざと怒らせるような事を  
言っただんだ……ゴメンね？」

「……………くっ！」

（まんまとコイツの口車に  
のせられて、裸の写真を撮られ。  
さらに感情まで思惑通りに  
操られるなんて……屈辱だわ!!）



（もう絶対に…思い通りにはさせないんだから！）

カシヤ

カシヤ

「グヘヘッ♪」  
（泣きっ面も可愛くて好みだけど  
こっちの反抗的で気丈な表情の方が萌えるんだなあ♥）

「次はみれいちゃんのリリマン」の中を撮るから」



「自分の指でパツクリ左右に拡げてくれる？」

「い、嫌よ！そんなの絶対に……」

「……」まで丸出しにしておいて、まだ恥しいの？」

「それだけは……ゆるし……」

「ワガママ言うのなら、顔も一緒に撮っちゃおうよ？」



ドクン…ドクン…ドクン…  
「…あ…はら…」

「みれいちゃん！  
ほら勇気を出して!!」

ドクン…ドクン…ドクン…

「いや…あ…」

…ムニユ





「ハア、ハア、ハア…  
これがみれいちちゃんのオマシコの中なんだね？」

「アニメやマンガでしか見たことなかったから  
もつとグロいのを想像してたけど…」

「ピンク色で艶やかで…  
こんなにも綺麗だったんだ♥」

「ハア、ハア、ハア、ジュルル…」

「うっ……んっ……!」  
「いやあ……!」

「グへへへ♥  
綺麗なオマシコをいっぱい  
撮ってあげるからね?」

カシヤ カシヤ

カシヤ カシヤ





カシヤ

カシヤ



「誰のオマージュが分かるように、顔も一緒にね♪」

MENU





「いいよみれいちゃん、凄く綺麗だよ♪」

カシヤ カシヤ カシヤ

私としたことが…脅されていたといえ  
あんな事をしてしまっなんて…

もつと冷静に対処していれば  
誤魔化して逃げられたかもしれないのに……

みれいは後になって後悔の念に駆られていた。

「委員長………?」

「南委員長!？」

「な、何かしら兩宮くん?」  
「ずっと呼んでいたのに……朝から様子が変ですよ?」  
「何でもないわ……気だしないで」  
「……」

「では、そろそろ校門を閉めますね?」  
「え! 肛門!？」 ビクッ  
「校門が……何か?」  
「いいから、はやく閉めなさい!」

やつぱり変だ、何か隠している。

南委員長を陰ながら見守ってきた僕には分かる。あの表情は、他人には言えない悩みを抱えてるに違いない。

南委員長長になりたい……!!

僕に何か出来ることはないだろうか……？



「ブーツ、やっぱ食後の一服は最高だな」

昼休み、非常階段で隠れてタバコを吹かす不良達。

「そうそう！昨夜エロ掲示板で、すげえ画像を見つけたんだよ」

「何だよ、まさかウチの学園の女子更衣室の盗撮画像かあ？」

「へへっ、もつと衝撃的さ！なんとあの…超真面目で超厳格な南風紀委員長のエロ写メが貼ってあったのさ！」

「そんなの天地が引つ繰り返つてもありえねえ！」

「確かに…目伏せがしてあつて断定出来ないけど、あれは本人だつていいや、ぜってー似てるだけだつて。つていうかその画像見せるよ」

「ちよつとその話、詳しく聞かせて貰えるかな？」

「ゲホツ、ゲホツ、雨宮副委員長かよ」

「本人登場かと思つて焦つた」

雨宮は不良から聞いたアドレスを入力し、画像を確かめる。

14/10/28(金) 21:25:39



□ ぼっくり(18)  
14/10/28(金) 21:45:05



□ 無題(25)  
14/10/28(金) 21:32:14



14/10/28(金) 21:25:42



□ 無題(42)  
14/10/28(金) 21:40:25



□ アナル(12)  
14/10/28(金) 15:25:39



「…これは…どう見たつて南委員長本人じゃないか！」

「君たち、この事は誰にも言わないでくれないかな？」

「そうすれば、喫煙の事は目をつぶつてもいい」

「ああ…構わないけど。見つけたのは俺だけと限らないぜ？」

あの男をあれ以上調子づかせる前に  
もう一度大神田校長に直訴して、**学部のプリパラを**  
解禁してもらおうしか手は無いわ…

誰があんなクズとテート(セックス)なんて…  
考えただけで吐き気がする！

「南委員長！」

「**雨宮くん…どうかしたの？**」

「**少しお時間を頂けませんか、お話があるので？**」

「**後にして、今はそれどころじゃないの！**」

「**急を要する、とても大事なお話なんです！**」

「……仕方ないわね。少しだけよ？」

「朝から様子が変わったのも…これが原因でずっと悩んでいたんですね？」



「やっぱり、南委員長本人でしたか…」

「嘘よ…こんなもの…」（顔は撮らないって言ったのに）

□ 無題(42)  
14/10/28(金) 21:40:25



□ ぱっくり(18)  
14/10/28(金) 21:45:05



□ アナル(12)  
14/10/28(金) 15:25:39



□ 無題(25)  
14/10/28(金) 21:32:14



※実際の画像は目伏せのみで性器には一切モザイクはかけられていない丸出しである。

「これを、何処で見つけたの!？」

「男子生徒が話しているのを小耳に挟んで、アダルト掲示板を確認したところ…大量に貼られていました」

「ぞ、そんな……」

「安心下さい。掲示板には削除依頼メールを出しておきましたので拡散は防げたと思います」

「…………でも、もう見た生徒もいるのよ。もし保存までされていたら」

「今は拡散の心配より、出どころを押さえる方が先です。一体何があったのか教えて下さい、南委員長の方になりたいんです!」

「雨宮くん、ありがと…でもこれは馬鹿な私が招いた事だから自分で何とかするわ」

「何とかならないから、あんなに悩んでいたんでしょ!？」  
「一人で背負い込もうとせず、僕に打ち明けて下さいよ南委員長!」

「いいから放っておいて!雨宮くんには関係ないんだから」

「関係あります!僕の大好きな南みれいが涙を流して困っているのだ黙って放っておけるわけがないじゃないですか!」

「雨宮くん……」

「その気持ちだけで十分よ♪ おかげで決心がついたわ」

（もう、あの男の思い通りにはさせない!）

「わかりました」

「南委員長ならきつと」一人で解決出来ると信じてますから!」

「ありがとう雨宮くん。じゃあそろそろ教室に戻りましょうか?」

「もう一つだけ…いいですか?」(ゴクツ)

「なによ、改まって?」



「事が済んで元に戻ったら、僕と…付き合ってください!」

「……私に告白なんて、100年早いわよ!」

「す、すいません…つい調子に乗りました」

「グスクス♪ まあ考えてあげてもいいけど、期待はしないでね」



「みれいちやんから  
ボクに逢いに来てくれるなんて  
嬉しいなあ〜♥」

「……よくも騙したわね?」

「騙すつて……いきなり  
何の事がさっぱり  
分かんないんだけど?」

「とぼけないで!  
昨日撮った写真  
顔を撮ってたでしょ!」

「しかも……ネットに貼るなんて  
ゼツタイに許さないんだから!!」

「なくんだ、もう気付かれちゃったか？  
でもちやんと目伏せを入れて、誰かはバレないようにしてあげてたる？」

「どこがよ…バレバレじゃない！」

「まあ、まあ…とりあえず、落ち着こうよみれいちゃん♪」

「慣れ慣れしく呼ばないで！もう恋人でも何でも無いんだから！」

「な、何を言い出すんだよ!? 半年間の恋人契約を破るつもりかい？」

「そうよ、もうあんたみたいな最低のクズのいいなりになるのはウンザリなの！」

「クズだなんて酷いよ…ボクはみれいちゃんを本気で…天使だと思つてたのに…あんまりだよ！」



「キモチ悪いからやめて！反吐が出るわ」

みれいは今までの鬱憤と写真を撒かれた怒りを晴らすようにのしり蔑む。

「だったら秘密をバラしてソラミスマイルもらあちちゃんも終わりにしてやる！」

「残念だけど、そうはならないわ。  
さつき大神田校長に直訴して、

学部のプリパラを解禁してもらったわ」

みれいはキモオタを追い詰めるために、一か八かのハツタリをかける。  
ところが……

「そうなんだ、凄いな。あの石頭の校長を説得できたんだ。

もしそれが本当だったらただけど…まあ嘘でも本当でも関係ないけどね♪」

「……………」

（やっぱり早めに保険を掛けておいたのは、正解だったんだな。グヘヘッ）

「ど、とにかく携帯を出しなさい！」

「どうして？」

「データを全部消去するに決まってるでしょ！」

「そんな事したって無駄だよ」

「!?」

「だってもうパソコンやメモ리카ードにコピーしてあるからね？  
もう絶対に消せないんだな♪」

「卑怯者…やっぱりあなたは最低のクズだわ！」

「そんな事言っていないのかな？  
今度は目伏せを外した画像を貼っちゃおうよ？」

「ちやめーっ!!」

「そうそう…みれいちやんだってハッキリ分かる  
顔出し全裸画像をネットにバラまかれなくなったら」

「ちやくんと、ボクの言う事を聞くんだよ?」

「……」

「じゃあ今日もみれいちやんの体を  
たつぷり堪能させてもらおうかなあ。グヘヘッ♥」

「やっぱ恋人同士なんだから、最初はキスからだね♪」

クイツ

「ひゅ……!」

「フヒッ」

「昨日は突き飛ばされて、申断しちやっただけど……」

「今度は最後まで口を離すんじゃないよ、いいねみれいちゃん?」

「ほ……」  
「お口を開けて舌を出して……んんん」

ピチャヤ…チユブ…

「ん…んむっ……」

「そうそう、お互いの舌を絡め合っただよ♪」

（どうして私が…こんな男と……）

「好きだよ…みれいちちゃん♥」

ベチャヤ…ピチャユ…

「んんっ……」

（助けて…雨宮くん……）

プチユツ

「んっ……むふう……」

ガクガク……ブルブル……

ジュル……チュル……ジュピ……

「ムヒツ……ムラフツツ」

キモオタの濃厚ティープキスは二十分以上にも及んだ。

チュウパア〜ッ

「ハアハアハア…あんまり良すぎで…  
息をするのも忘れるくらい…ハアハア  
夢中になっちゃったよ。」

「は〜っ…は〜っ…」

「みれいちゃんも目をトロ〜ンとさせて  
そんなにボクのキスが良かったの？  
デヘヘッ♥」



「次はオツパイの揉み心地を確かめるからね？」

ムニョ〜ツ

「いやあっ!!」

「ムニョ〜おとなしくしてな〜ど…」

「男子生徒全員に、みれいちちゃんのBカップオツパイを晒す事になつちやうよ?」

「……!!」

「アッアッアッアッアッ」

「んっ...んっ...んっ...んっ...んっ...」

「弾力があって...張りもあって...マッシュマロみたいにかい  
最高級のオツパイだね?」

ムニョ...ムニョ...

「アッアッアッアッアッ」

「アッアッアッ...」

「さ〜て、お味はどうかな〜?」

「レロ…レロ…レロ…」

「あひいひい…!」

「ペチャ…チュプ…ピチャ…!」

「みれいちゃんのオツパイ…ハアハア…美味しいんだな」

「カリツ…プチュ〜」

「いっ、いやあ〜っ!」

「チュ〜、チュ〜、チュパツ…」

「やっぱりミルクはまだ出ないね、「ドドン」」

「さ、次はいよいよ  
オマンコの味見だよ？  
後ろを向いて  
前かがみになって…」

「そうそう  
プリケツを思いっきり  
突き出すんだよ♪」

「……」

「デスヘヘヘッ」

スルル…

「やあああ………」

「ハアハアハア♥  
やっぱりみれいちやんの  
パイパンロリマン」は  
何度見ても  
堪らないんだなあ  
ハアハアハア……」

ぺちや…ピチヤ…チユプ…

「ハア…ハア…ハア…ハア…イヒヒツツ」

ガクガク…ガクガク…ビクツ！

「う…ん…ん…ん…ん…」

「美味しいんだな…  
みれいちやんのオマンコ♥」

「ミミツツ」

くぽあ〜♡

ビクンッ

「あーっ」

「グヒヒツツ」

中(腔)もタ〜ツプリ  
味見させてもらっかね?」

「やああ〜……」

ピチュ…チュパ…プチュ…

「ハアハア…みれいちやんのマンコ汁♥」

ガクガク…ブルツ

「やっ…んっ…いやあ…」

「甘酸っぱくて、まるやかで…癖になりそうな味だよ♪」





「ハア…ハア…」

ハア…ハア…」



ゴクゴク

ゴクゴク



「もう我慢できないうんだなあ…」

カチャ…ズルルツ…



「うわああーっっ！」

「エへへ、びつくりした？」

でもまだセックスはしないから安心して♪

オマンコは初デートまで大事に取っておきたいからね♥

その代わり…みれいちゃんのお口ですべてもらいたいんだ？

ボクがしたみたいにな、舌を使ってね♥」

む~~~~ん

「うっ………」(クサイ)

「ボクのチンポそんなに臭う？」

「一週間くらい、お風呂に入ってなかったけど……」

ビクッ ビクッ

「ぞ、そんな汚いモノを舐められるわけ無いじゃない！」

「そっか…じゃあ残る穴は肛門だけだね？」

「いやあっ………!!」

ペチャ…ピチャ…チュプツ…

「いよいよみれいちゃん…すぐくきモチいりよ…」

ビクンツ…ビクンツ

みれいの舌使いに合わせ、竿が激しく痙攣する。



「はあ…はあ…うぷっ…うぷっ…うええっ…」

強烈な悪臭に鼻の息を止めていても  
何度も吐き気に襲われる。

レロ…レロ…

「ほらほら、もっと舌を動かして！  
ペースがだいぶ落ちてきたようだけど…  
ボクがイクまで終わらないんだからね!」

「うううう、イクよみれいちゃん！」

ビュルルビュクンビュクン

「あぁーっ!?!」



「グヘッ、みれいちゃんの顔だらっぱい出しちゃった♥」

「南委員長〜！」

「…雨宮くん」

「昨日頼まれていた書類の「コピー」  
済ませておきましたので」

「そう、ご苦勞さま♪」

「ど、どころで…例の一件、あれからどうなりましたか？」

「ええ、解決したわ。雨宮くんのおかげでね♪」

「よ、良かった♪…って僕なんて何も！」

「フッフ」

「それで…あの…(ドキドキ)僕があの時言った…  
お返事を…聞かせて貰えますか？(ゴクツ)」

「告白の…返事ね？」

「悪いけど……いめんざい」

「そ、そうですよね……僕なんかが南委員長と……」

「話は最後まで聞きなさい！  
別にNOって言うてるわけじゃないの。むしろ……」

「いつも私のために尽くしてくれる雨宮くんに告白されて  
凄く嬉しかったし、普通の女の子みたいに恋愛もしてみたいわ。  
でも……私には神アイドルになる大きな夢があるから。  
今は恋愛にかまけている余裕はないの……」

「南委員長……」

「けど……私の夢が叶った時。もし雨宮くんに彼女が居なかったら  
私を……彼女にしてくれる？ 待てるわけ……ないよね……」

「ほ、本当ですか!? 南委員長と付き合えるのなら  
僕はいつまでも待ちます！」

これからソラミスマイルの「ファン」として  
みれいが神アイドルになるまで応援し続けますから♡」

「ありがとう、雨宮くん♡」



…本当に待っていてくれるかな？  
ああ見えて雨宮くんって眼鏡取るとけっこうイケメンだから  
本人は気付いてないけど、隠れファンが多いのよね……  
でも…雨宮くんは私一筋ってカンジだし、信用できるかな♡

「み・れ・い・ちや〜ん♪」

「はっ！」

「随分ごきげんだけど、何か良い事でもあったの？」

「べ、別に何も無いわ…」

「ぶ〜ん。ま、いいけど。それより今週末空いてる？」

「!!」

「一緒に遊園地と映画行こうと思ってさ♪」

「駄目！週末はプリパラライブがあるから」

「いつも行ってるじゃないか？それにもうチケットも買ってるんだよっ！」



「ランクアップの掛かった、どうしても外せないライブなの！」

「ボクとデートするよりも、プリパラの方が大事なんだ？」

「う……………」

「じゃあさ、もうプリパラやめちやおっか？」

「そんなの嫌！」

「二人の時間が割かれるようなら、プリパラをやめさせるって言ったよね？」

「わかったわ…デートするからプリパラを続けさせて……………」

「デヘヘ、いいよ♪」

「じゃあ待ち合わせの時間と場所は放課後伝えるから、今日も必ずア二研部室に来るんだよ？」



「……………」



「ほらほら、すっかりカメラを  
見なぎや駄目だろ!?!」

カシヤ カシヤ カシヤ

キモオタは堂々と顔を写し  
より鮮明に撮るためにスマホから  
デジタル一眼レフカメラに持ち替え  
みれいの裸を撮影していた。



「みれいちゃんは写真を撮られる時  
いつもそんな無愛想な顔してるの？」

「!？」

「違うだろ。  
お家にあるアルバムの写真  
思い出してごらんよ？」

「そうそう、スマイルスマイル♪」

笑顔まで強要させた。



「ピースしながら  
ニッコリ笑って〜?」

「はい、チーズ♪」

カシヤ



「凄く可愛いよ、みれいちゃん♥」

カシヤ カシヤ



「次はオマツコ開いて撮るよ?」

「!!!」

「中までよく見えるように  
両手でパツクリ開らいてね?」



「貫通前の処女マスコを  
いっぱい写真に撮って  
残しておかないとね？」

「それでいいよ、みれいちゃん」

「……んっ」

……んっ

「目を閉じちや駄目だろ！」

カシヤ カシヤ

「もっと楽しそうに笑って！」

「あはっ♪」



「いいねいいよ」  
その笑顔、とっても素敵だよ」

カシヤ カシヤ カシヤ

土曜日の午後二時に  
パラ草橋駅前で待ち合わせだよ♪

「.....」

みれいは三十分前から  
憂鬱な表情で待ち続けていた。  
しかし時間が過ぎても  
キモオタは一向に現れない。

このまますっぽかしてくれればと  
みれいは心の中ですつと念じていた。



しかし、そんな願いもむなしく……

「お待たせ〜」

「!!」

「あれ、どうしたのみれいちゃん。もしかして、少し遅れて来たから怒ってる?」

「別に……気にしてないわ……」

「そっか、良かった♥」

「それにしてもみれいちゃんいつも制服姿もいいけどその服もすっごく似合ってるね」

「そ、そっ……」

「プリピュア頑張れ〜！」

「……………」

「プリピュア頑張れ〜！」（女児達の声援）

映画 上映終了後

「みれいちゃん、プリピュアオールスターズはどうだった？」

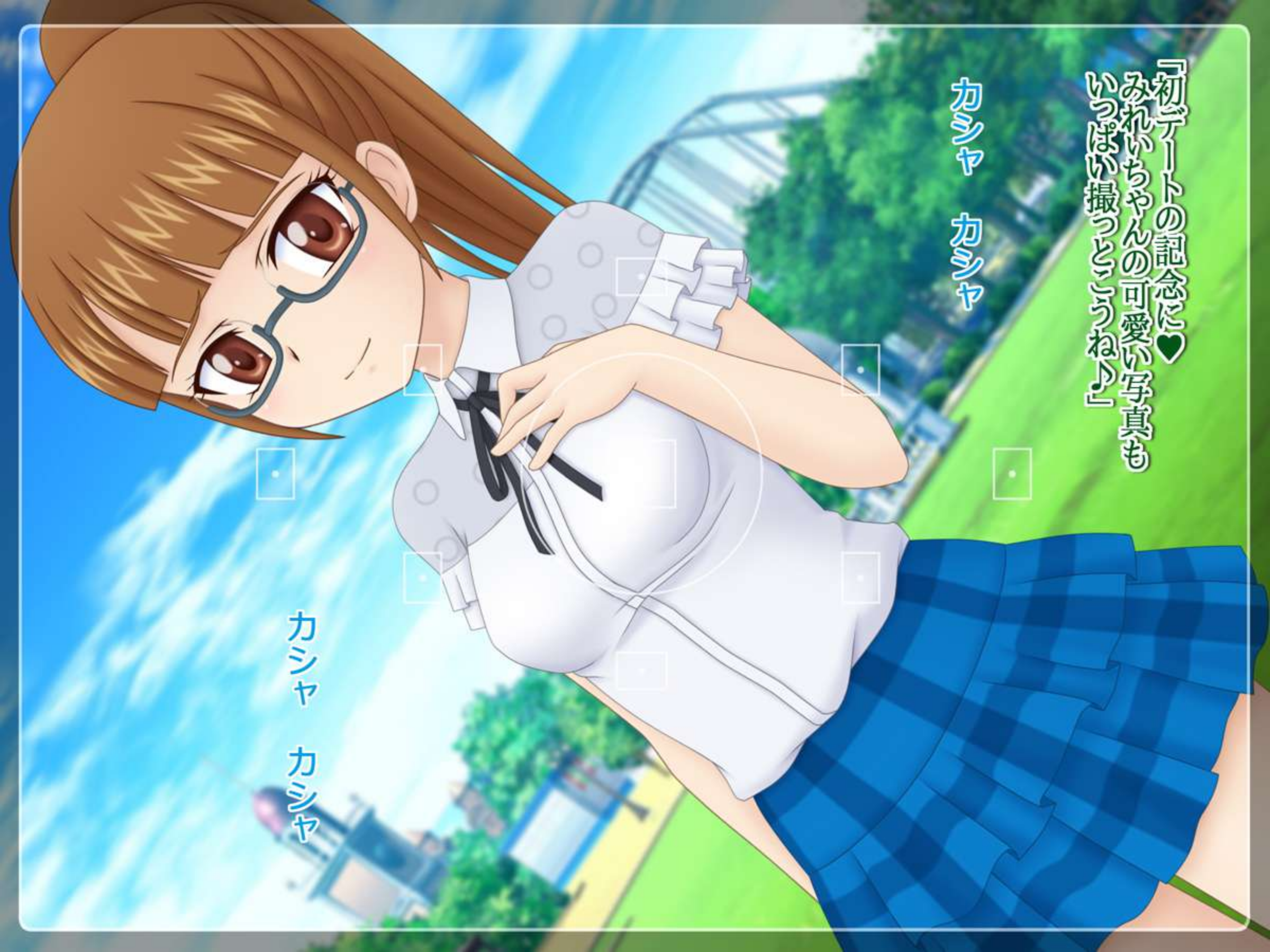
「ええ、面白かったわ……………」

「デヘヘ、気に入ってくれたんだ♪  
じゃあ次は遊園地だね！」

「初デートの記念に♡  
みれいちちゃんの可愛い写真も  
いっぱい撮っとこうね♪」

カシヤ カシヤ

カシヤ カシヤ

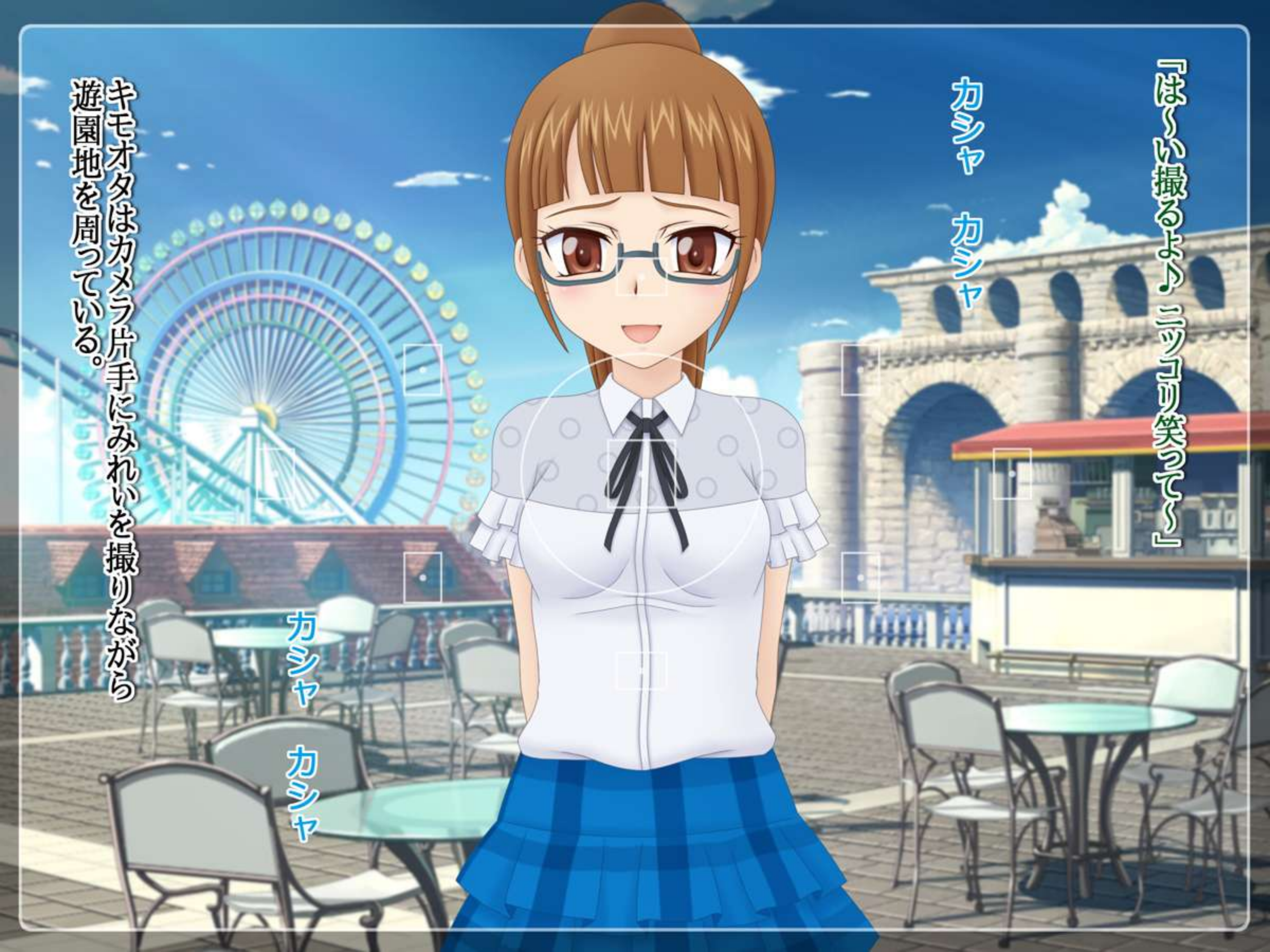


「ほくろい撮るよ♪ニッコリ笑って〜」

カシヤ カシヤ

キモオタはカメラ片手にみれいを撮りながら  
遊園地を回っている。

カシヤ  
カシヤ



「みれいちやんさあ、さつきから思ってたんだけど…  
なんか笑顔がぎこちないんだよね」

「え……！」

「今日は風紀委員の仕事も、プリパラの事も全部忘れて  
思いつきり楽しんで構わないんだよ?」



「ほら。  
心を空っぽにして、ピースしながら  
素直に笑ってごらん?」

「……ふんふん。」

「そうそう、とつても良い笑顔だよ♪  
今日はいっぱい遊んで  
二人だけの楽しい思い出をたくさん作ろうね?」

カシャ カシャ

もう帰りたいよ……

「日も暮れてきたね…まだまだ遊び足りないのにさ…  
やっぱ楽しい時間はあっという間に過ぎちやうんだね?」

「……………」

「帰りが遅くなって親が心配するといけないから  
そろそろ自宅に電話しておこうか?」

「……………」

「あ、でもその前だ…観覧車に乗るのを忘れてたよ!  
閉園まであと三十分あるから、まだ間に合うね♪」

「デートといえば遊園地、観覧車といえばお約束の…アレをしないとね♥」

「むっ!!」

「デヘヘヘッ♪」

ガクガク…ガクガク…

「むうう…んうう…」

「やっぱり観覧車でするキスは、いつもするキスより格別だね？」

チュププ…チュル…チュル…

「ピピピ、さつき二人で食べたソフトクリームの甘い味がするよ♥」



「ぷはあ〜」

「はあ…はあ…はあ…はあ…」

「この後はラブホにお泊りして、朝まで帰れないから  
観覧車を降りたら自宅へ電話して  
らあらちゃんの家にお泊りしてもらおうって嘘をつくんだよ?」

「……はあ」 パパ…ママ…助けて…

キモオタは**ラブホテル**に入室すると、直ぐにリュックからハンディカムと三脚を取り出し撮影の準備を始める。

「ようこそ……ごんぐ。」

「いつたい……何をしてるの？」

「決まってるじゃないか」

「今日はボクたちが結ばれる**(初セックス)**記念日だからね♥ビデオに撮って残しておくんだよ？」

「ぞ、そんなのいやよ……」

カチヤ、ウイーーン

「よし準備完了……じゃあ撮影いくよ？」

みれいちゃんが脱いでいくところから撮り始めるから、宜しくね♪」

「やああ……」

みれいの意思に関係なく、撮影は開始される。





ウィー  
HD

「ああ……」

みれいはチラチラと  
カメラを意識しながら  
最後のショーツを  
ずり下ろしていく。

スルル…

「全部ヌギヌギしたら  
ベッドに座って」

「カメラに向かって  
思いつ切り股を開くんだよ?」

ガバツ

「……うん……」

ブルブル…

「直ぐにセックスしてもいいんだけど  
時間もタツプりあるし♪  
みれいちゃんの自己紹介ビデオを  
撮ろうと思うんだ♥」



「ど…どうぞよろしく、南みれいです。  
私立パプリカ学園…」

「はい、ストップ！

表情が固すぎるよ、みれいちゃん？」

「こういう場所で

緊張するのは分かるけど…  
もつとリラックスして」



「明るく笑顔でね？」

「はい…」

今から好きでもない男に  
無理矢理犯されるとわかっていて  
笑顔で喋れるわけがない。

「じゃあ最初からいくよ？」



「どうぞよろしく南みれいです♪」

私立パプリカ学園 学部 年、風紀委員長を務めています!」

「うん、その調子だよ♪」

「血液型はA型です。  
好きな食べ物は、スイーツなら何でも♪  
えつと…趣味は読書とプリパ」

「はい、カット!  
そういう普通の事言っただって、つまんないだろ?」

「え…だったら何を…?」

「じゃあここからはボクが質問するから、それに答えてよ?」

「……はい」

「好きな男性のタイプ、教えてくれる？」

「真面目で…頼りなる、優しい人です」

ポ、ボクにピッタリ当てはまるんだな♪

「学校で好きな男子はいる？」

みれいの脳裏に雨宮の顔が浮かぶ。

「……はい」

「もしかして、もうその男子と  
付き合ってるのかなあ？」

みれいはいいえと答えようとしたが  
キモオタの顔を見て  
はいと答えるしかなかった。

「はい……」

「グヒヒ♥」

「その彼とは、もうキスしたの?」

「……しました」

「へえへ、じゃあセックスは?」

「ま……まだです」

「はやく彼に抱いてもらえるといいね?」

「……はい」

「みれいちゃんは何歳で初潮がは初じまったのかな?」





「なっ!!!.....」

あまりに下劣で卑猥な質問に  
頬を赤くして絶句するみれい。

「早く答えてよ、みれいちゃん?」

「.....歳です」

「そんなに早かったんだあ?  
じゃあ...学...年生で  
もう赤ちゃんが産める体にな  
ってたんだね♪」

「.....」

「みれいちゃんは週に何回、オナニーしてるか教えてくれる?」  
性器をズームしながら更に卑猥な質問を続ける。

「……………!!!」

「どうしたの、そんなに動揺しちゃって?」

「オナニーなんて誰でもやってる事なんだから  
全然恥ずかしくもないんだよ?」



「2……2回です」

「え〜っ! たった2回だけ!」

「本当はもっと やってるんでしょう? オナニストのボクに 嘘は通用しないんだから」

「……………」

「ほら、正直を言ってるから〜」

「……………5回です」

「それも嘘だね? 本当は毎日してるんでしょう?」

「ぞ、そんなにしてないわ!」

「フヒッ、その慌てようは凶星だね?」

「カメラに向かって宣言しようか？  
私は毎日オナニーしてる変態ですって  
オマソコをパツクリしながらね♪」

「ぞ、そんなの嫌！」

「できないの？」

「だったらカメラの前で  
オナニーしてもらおうかなあ？  
その場合はみれいちゃんがイクまで  
撮影は終わらないからね？ フヒツ♪」

「いやあ……」





HD

● REC

「私は…毎日オナニーしている  
変態です…」



● REC

「どうぞ私の淫らなマンコを…  
御覧ください…」

くぱあ

「はい、よくできました♪  
ご褒美にオマソコを  
いっぱい気持ちよく  
してあげるからね?」

たいへん  
よくでき  
ました。



HD



「ん…ん…ん…ん…ん…ん…ん…」

ピクンッ

ピクンッ

ピチャ…:チュプ…:クチャ

「毎日オナニーにしてるだけあつて濡れやすい敏感なオマンコだね♪」

ガクガク…ガクガク…

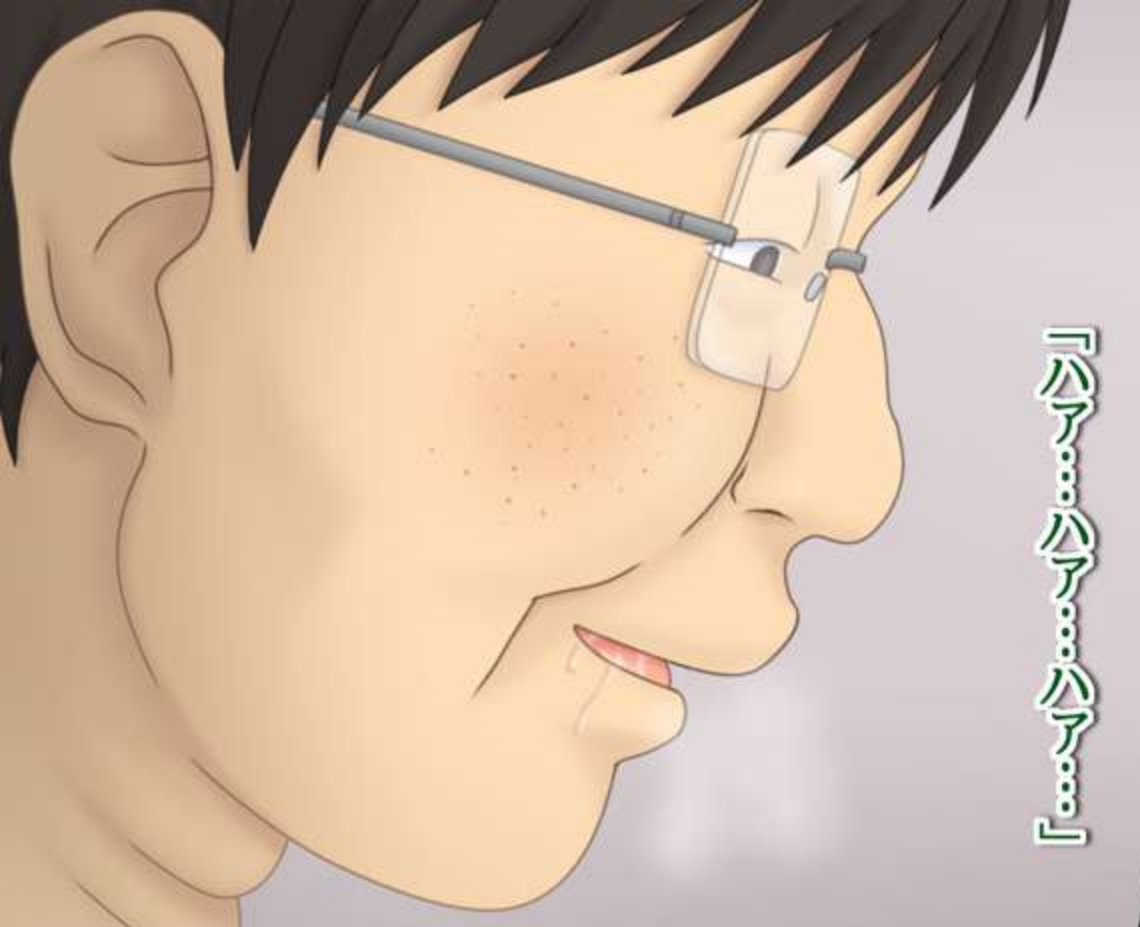
「はぁ…はぁ…はぁ…」

トロ……

「ふうっ…  
これだけ濡らしておけば  
大丈夫かな？」







「ハア…ハア…ハア…ハア…」



ゴクゴク  
ゴクゴク



「心の準備は、できてるね?」

「さあ、いよいよはセックスするよみれいちゃん?」

アッ

「……………」

ガチガチッ

ミチツ…プチュ…

「…らぎらぎ」

「固くてうまく挿入らないなあ」

グググッ…

「挿入ったよ！  
みれいちゃん♪」

ギチッ

ギチッ

ズブズツ…ブチュツ！  
「うあああーっ！！」

「みれいちゃんの中(膣)ヌルヌルして  
あつたかいんだなあ♥」

ズチュ  
ズプツ  
ズリユツ

「ハア、ハア、ハア♥」

「あうっ……うっ……  
痛っ！」

ギシィ  
ギシィ  
ギシィ

「セツクスってこんな  
気持ちいいんだっ♥」





「ま...まぢが...  
嘘でしょ!?!」

「ん...ん...」

んんんんんんんんんんんん

「めんね、みれいちゃん」

んんん

んんんんんん

ズルル……  
ゴプツ……ドトロ……

「中に出しちやっただよ」

「いやあ——っ!!」

「でも安心してよ  
もし赤ちゃんが出来ても、ボクが責任をとって  
みれいちゃんをお嫁さんにしてあげるから♥」

「ほらほら、ロストバージンの  
記念写真なんだから  
もつと嬉しそうしなまきや?」

カシヤ  
カシヤ





「うん、凄くいいよみれいちゃん」

「次はマシコ開いたまま  
ピースしてくれる？」



カシヤ

「はい、チーズ♪」





「第2ラウンドはくよ?」

ガバツ

「やっ...何っ!?!」

「い、いやあー！  
もう許して……」

「ごらごら、動いたら  
間違つて肛門に挿入つちやうよ？」

「ひっ……」



「2回目は簡単に挿入ったね♪」

「かはあっー!」

ズリユリユツ!!



HD

● REC

「ほくら、見てごらん？  
みれいちやんのオマシコが  
ボクのチンポを美味しそうに  
啜えてるところを  
ビデオに撮ってるんだよ♪」

「あひら……」

「あとで編集して、BDに焼いたら  
みれいちやんにもあげるからね？」

ズポツ

ジユプツ



「あうっ…:またイクよみれいちちゃん！  
ボクの濃厚チンポミルクを  
子宮の奥にいつぱい  
注いであげるからね♥」

ドピュピュクッ

ポロシ

「くほっ!!!」

ムハン

ムハン



〜二時間後〜

「みれいちちゃんのオマソコで汚れたんだから  
自分でキレイにするんだよ?」

「お回を〜お回を〜」

「はぁ…はぁ…」



ゴクツ...

「んああ.....」

精液や破瓜の血のこびりついた  
チンポを見て躊躇するみれい。

「ほらほら、さっさとチンポを啜えて  
お掃除フェラするんだよう?」





ジューポ...ジュープ...

「そうそう...  
お口いっぱい頬張って  
舌で包み込むように  
おしゃぶりしてごらん?」

「んっ...むっ...おっっっ」

「ああ...とっっても最高だよ  
みれいちゃん♥」



「今度は後ろからハメてあげるから  
カメラに向かってお尻を突き出して  
おねだりしようか?」

「……………」(もっぴいやあ……)

「オマシコひろげながら  
ボクの言った通りに言うんだよ?」



● REC

「みれいの淫乱マンコを…  
大好きな秋葉くんの…  
太くて…硬い…  
たくましいオチンポで…」

「もっとうっげい…  
可愛がって…下さい」

「グヘヘッ♪  
みれいちゃんは  
ホントにスケベだなあ♥」



HD



「いいよ♪みれいちゃんのオマシヨがボクのチンポの形を  
覚えるまでいくつぱい可愛がつてあげるからね♥」

ズブズブツ

「んぐっ！」  
ピグツ

パパ…ママ…

雨宮くん…

助けて…

パンッパンッパンッ

ズチュズニユ

「みれいちゃんのオマンコ  
凄く気持ちいいよ♥」

「あっ……あっ……あぁ……」

「ほらみれいちゃんも  
声を出して言うって？」

「お、おまんこ……んっ！  
気持ちいい……んあぁ……」

「グヘヘ♪」

「んっー。」

ズプッ  
ズプッ



「んっ。」

ズプッ

「ふう…前の穴はもういっぱい溢れちゃったね♪」

ムニユ

「お尻の穴、試しちやおつか？」

ビクッ

「やあぁっー！」

「アナルセックスの味を  
一度覚えたら  
病みつきになって  
やめられなくなっちゃう  
らしいよ？」

「そ、それだけはお願い…  
許して！」

「ダメ♥」

ミチツミチツ

「ムラフツ♪  
これでみれいちちゃんの穴は  
全部ボクのモノになったよ♥」

ズブズブ

「あがあああ——っ!!!」





パンツ  
パンツ  
パンツ

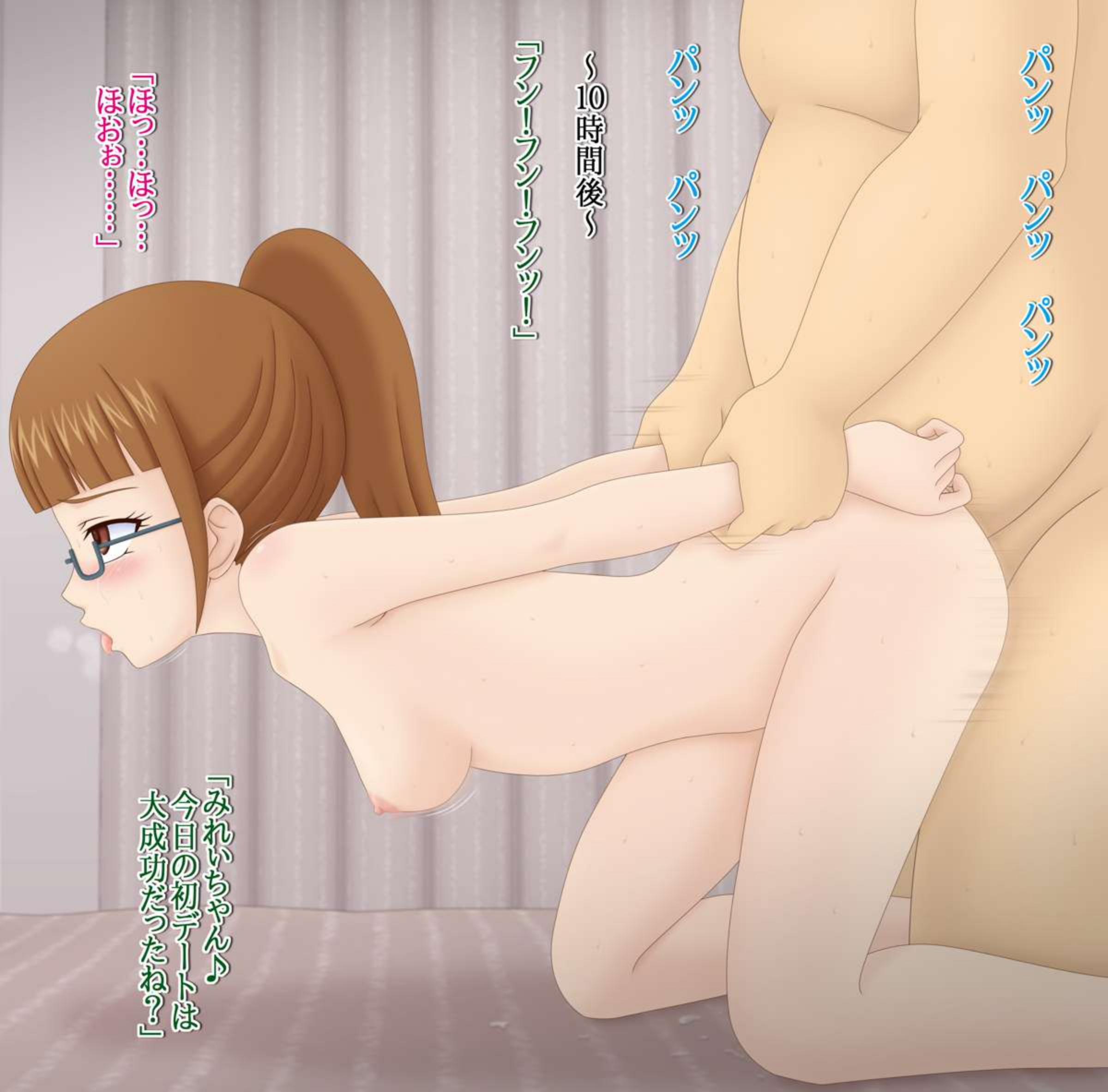
パンツ  
パンツ

〜10時間後〜

「フン！フン！フンツ！」

「ほっ…ほっ…  
ほおお…ほっ…」

「みれいちゃん♪  
今日の初デートは  
大成功だったね？」



● REC

「ほら、カメラに向かって  
ダブルピースするんだよ」

「.....」

「おっど楽しんでるみたい〜」



HD





HD

● REC

「そうそう、  
どつてもいい笑顔だよ  
みれいちゃん♥」

レッツGO!みれパラ

おわり



















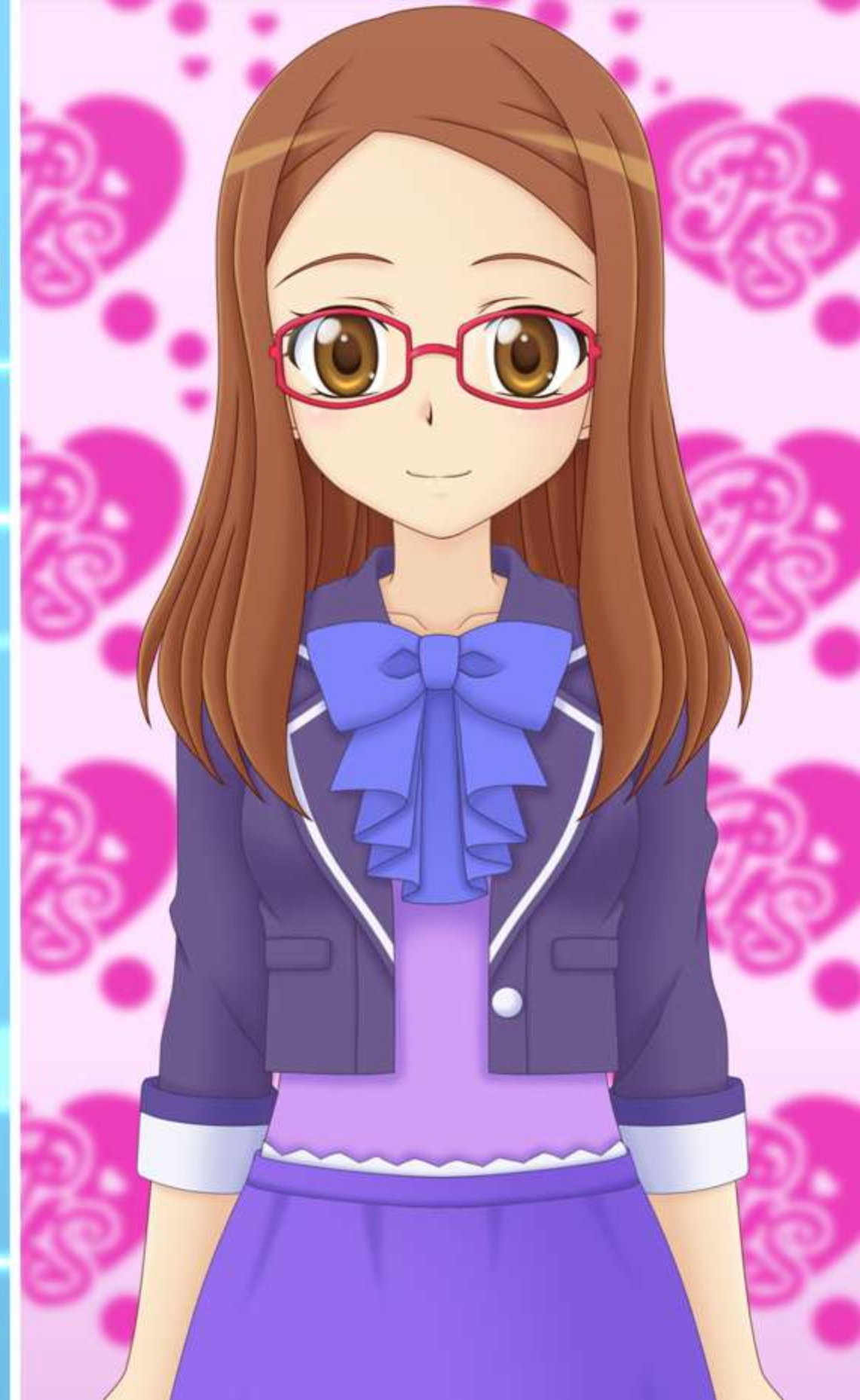












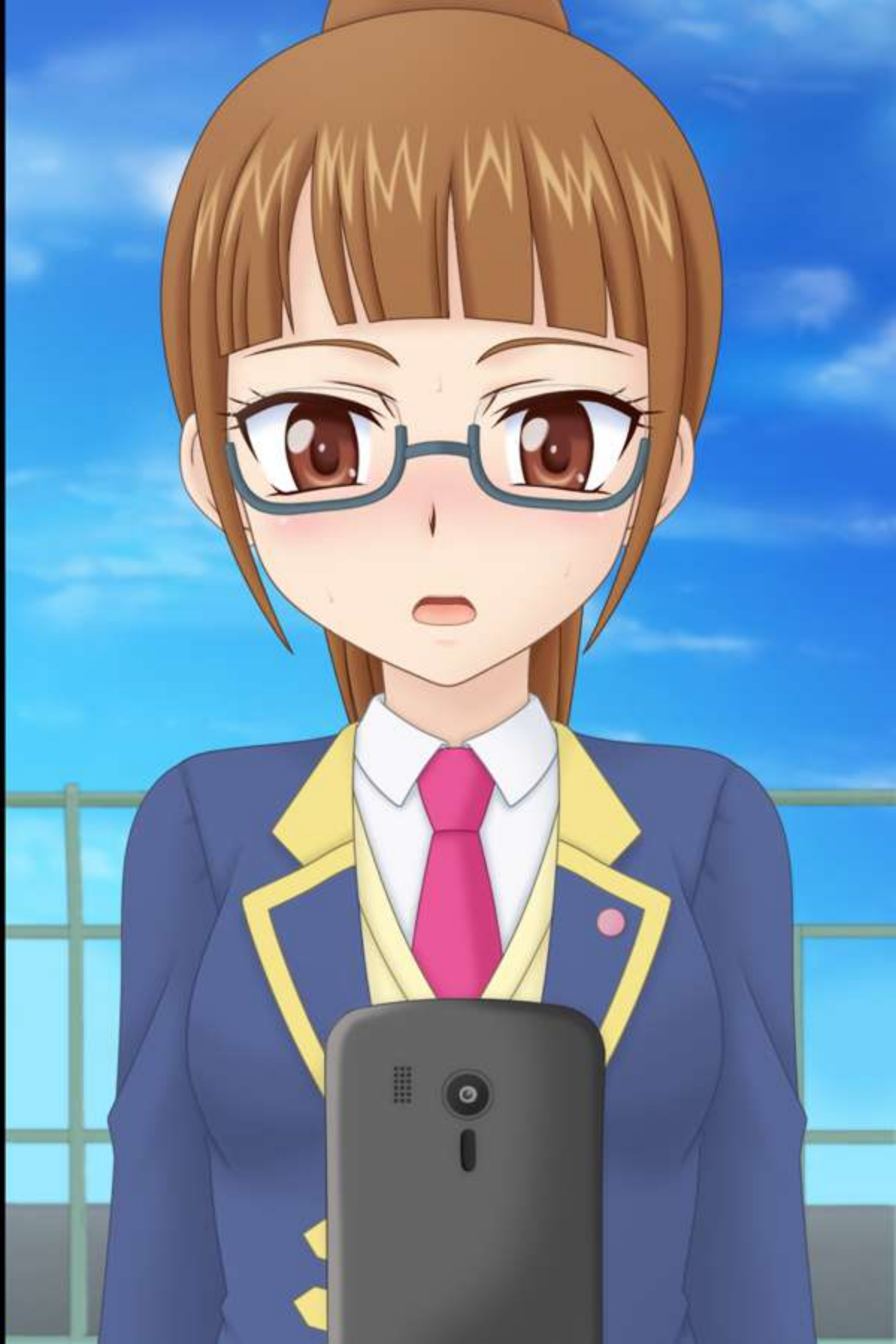














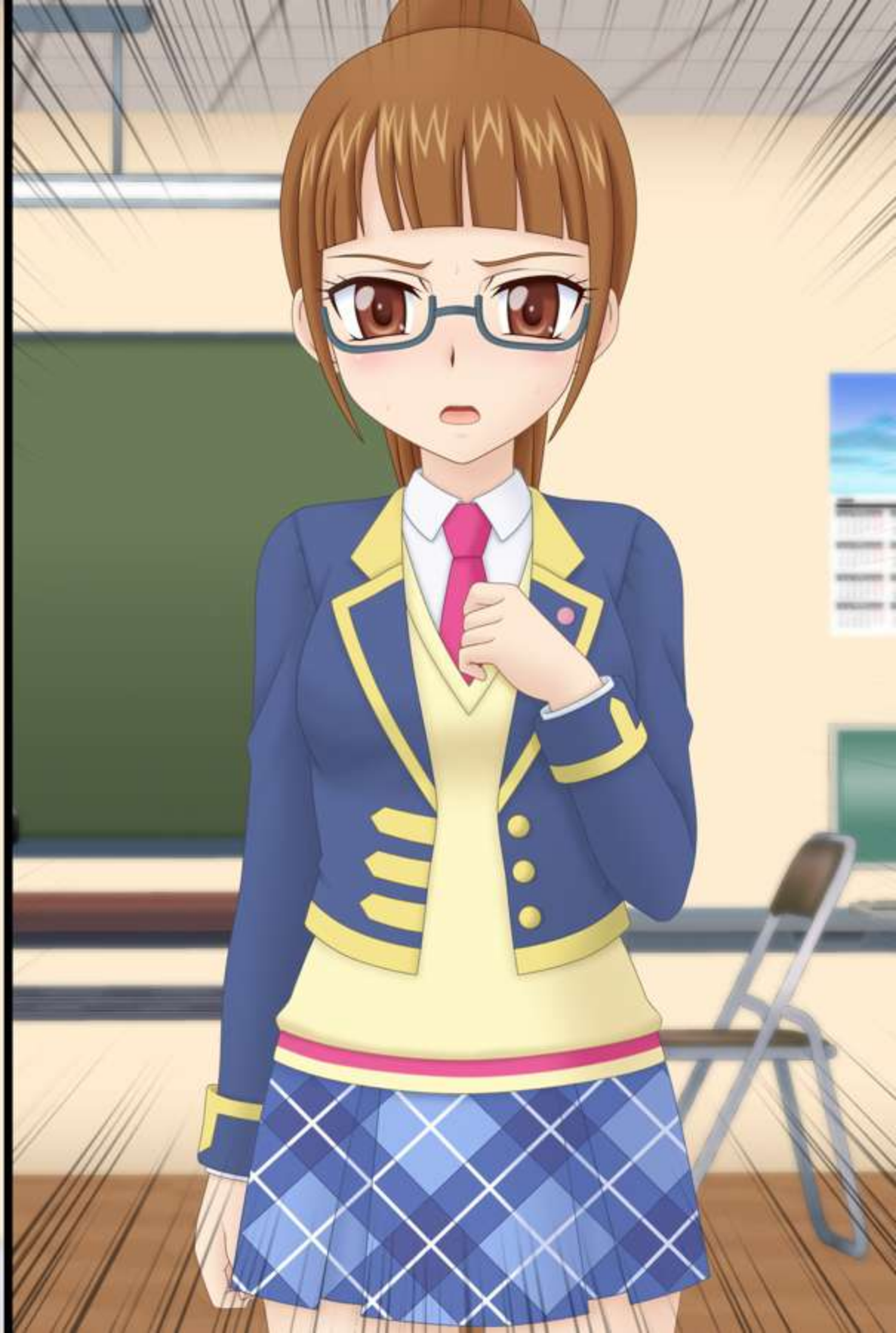




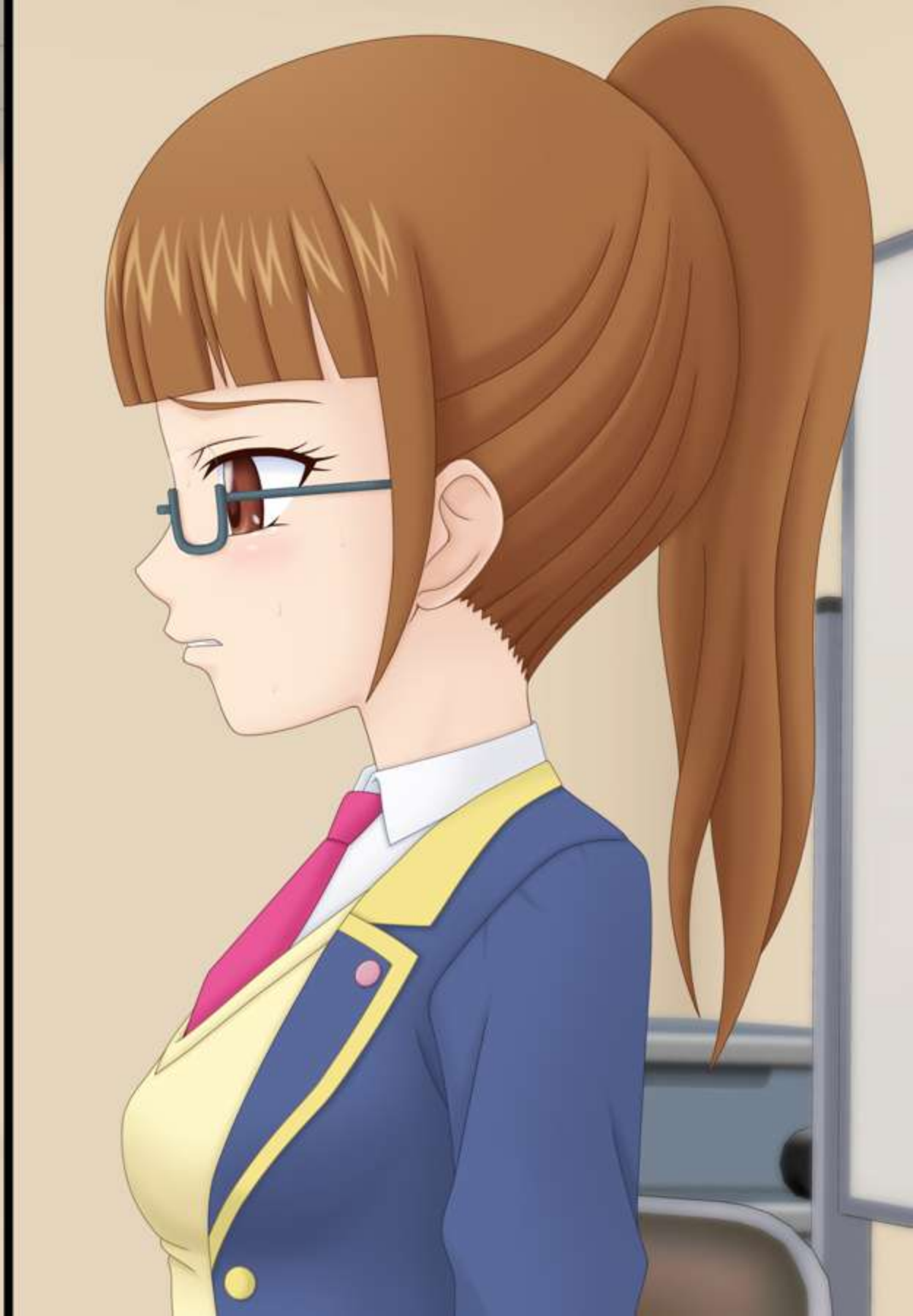




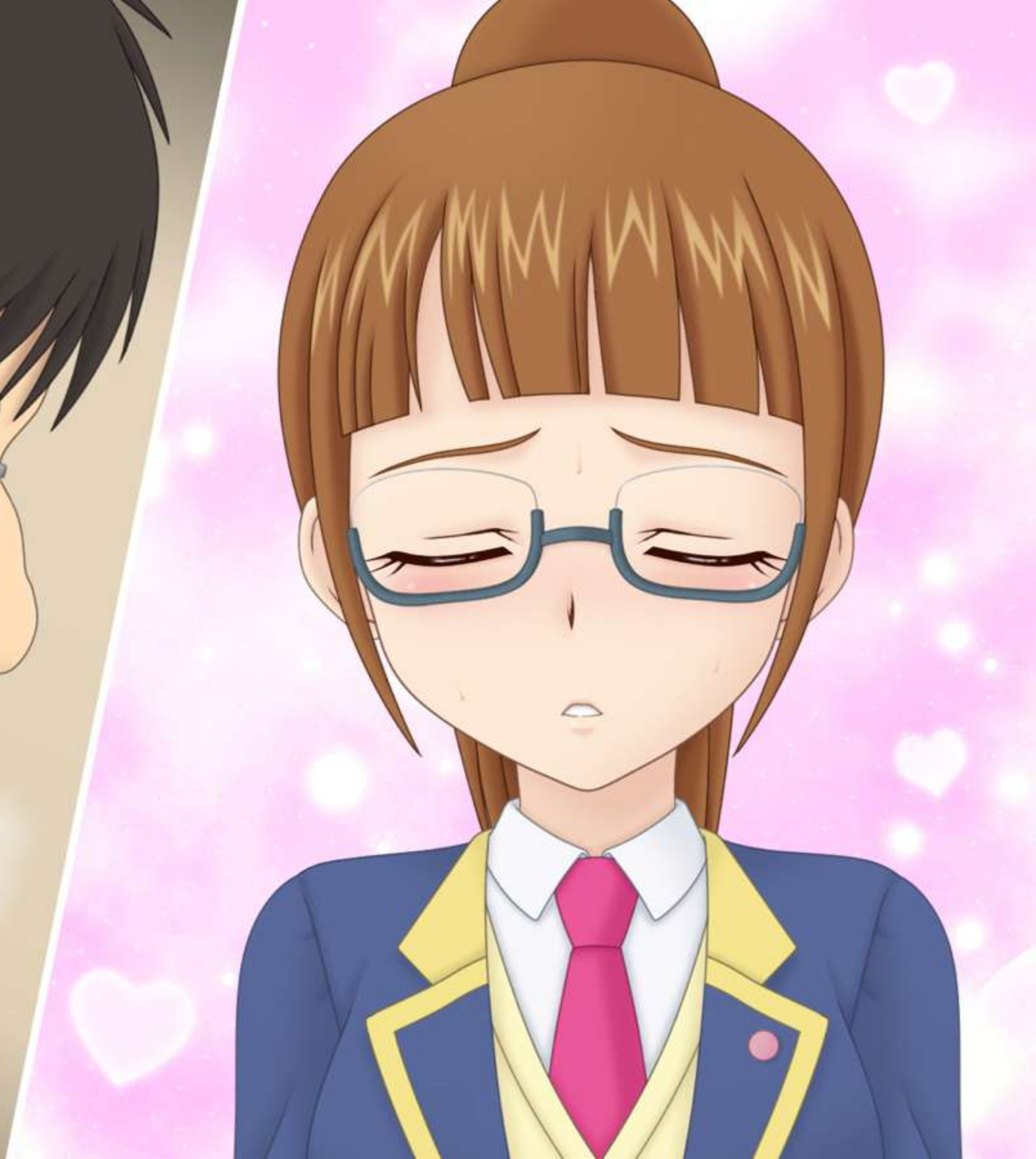
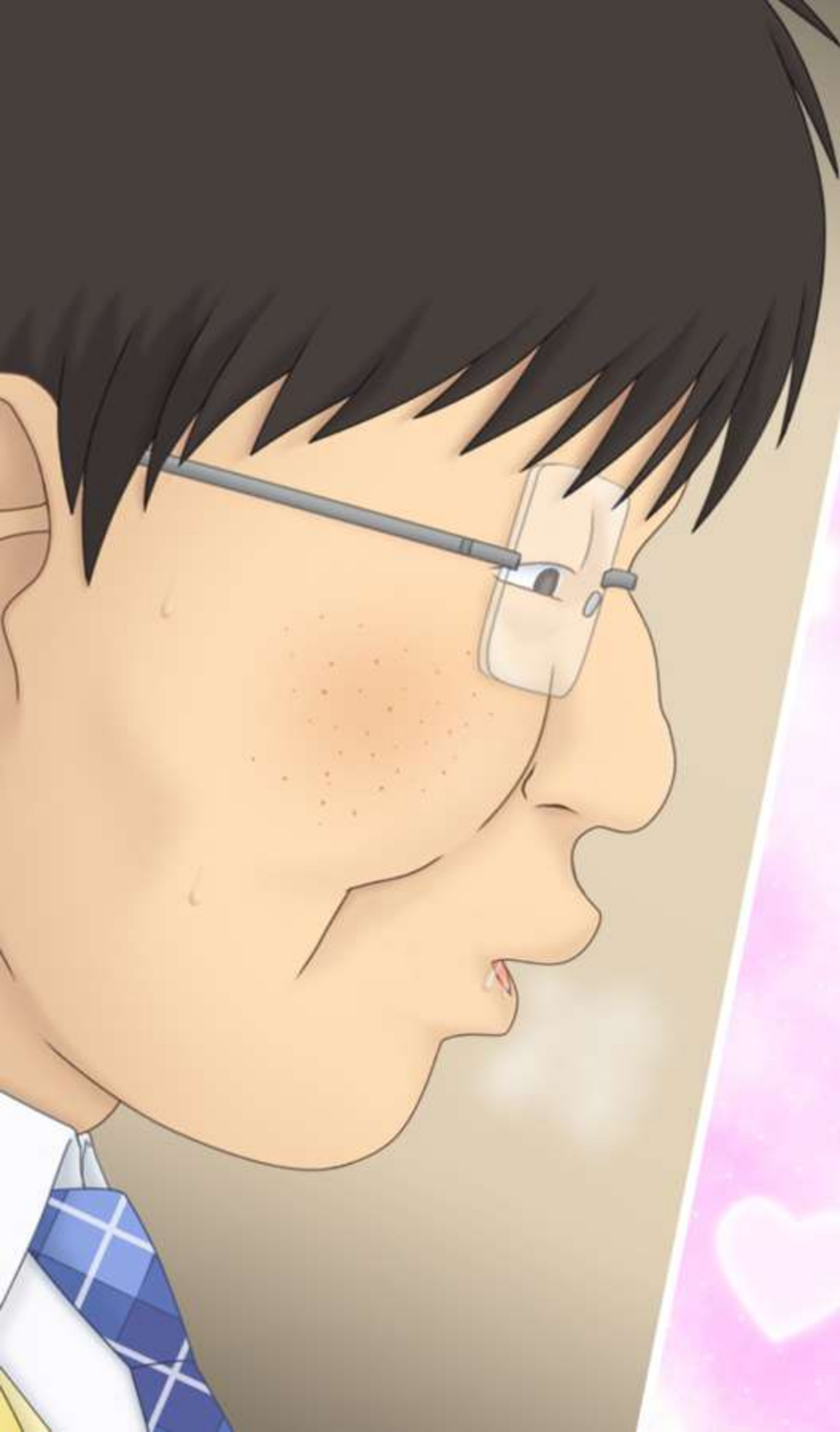
























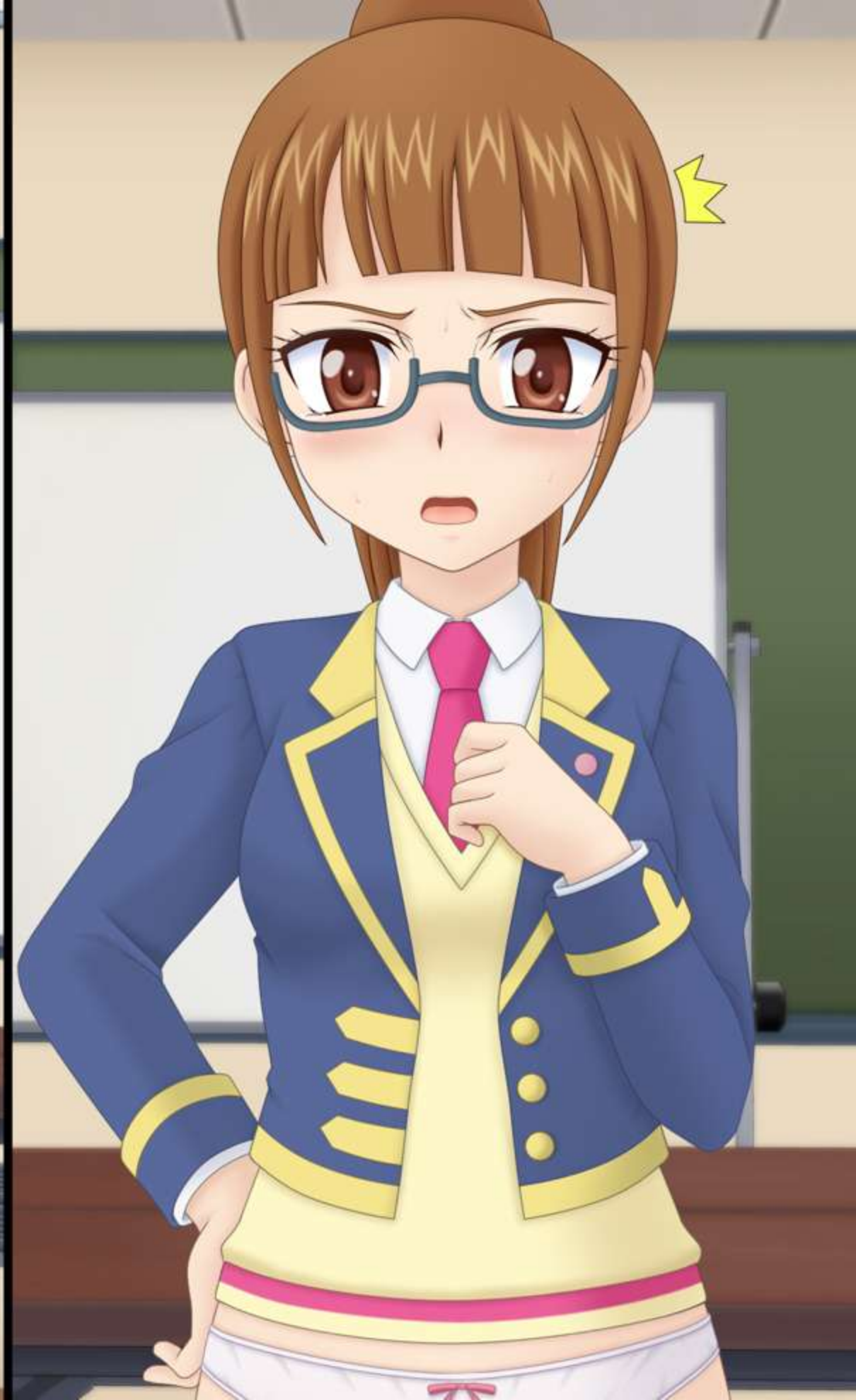






























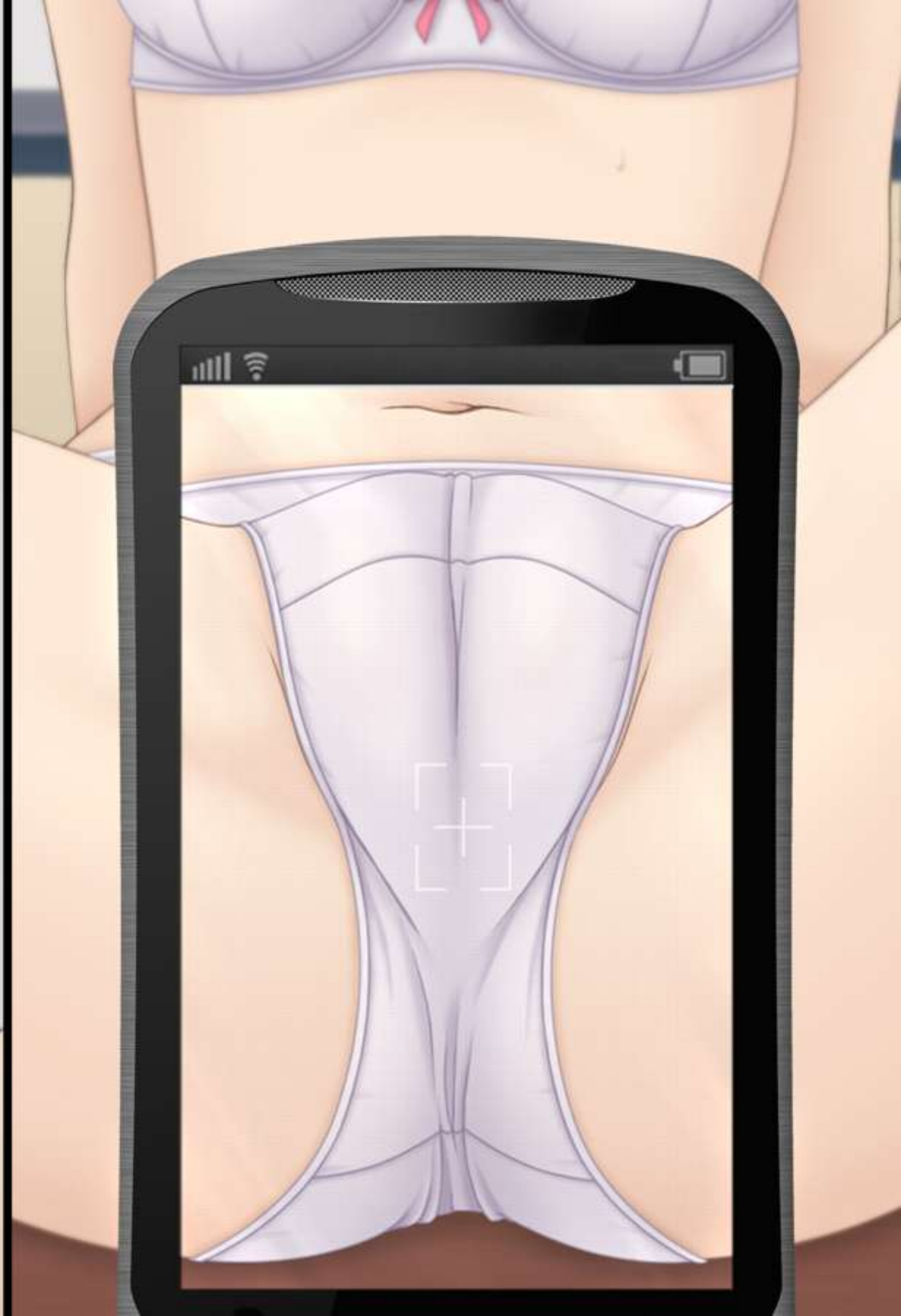


































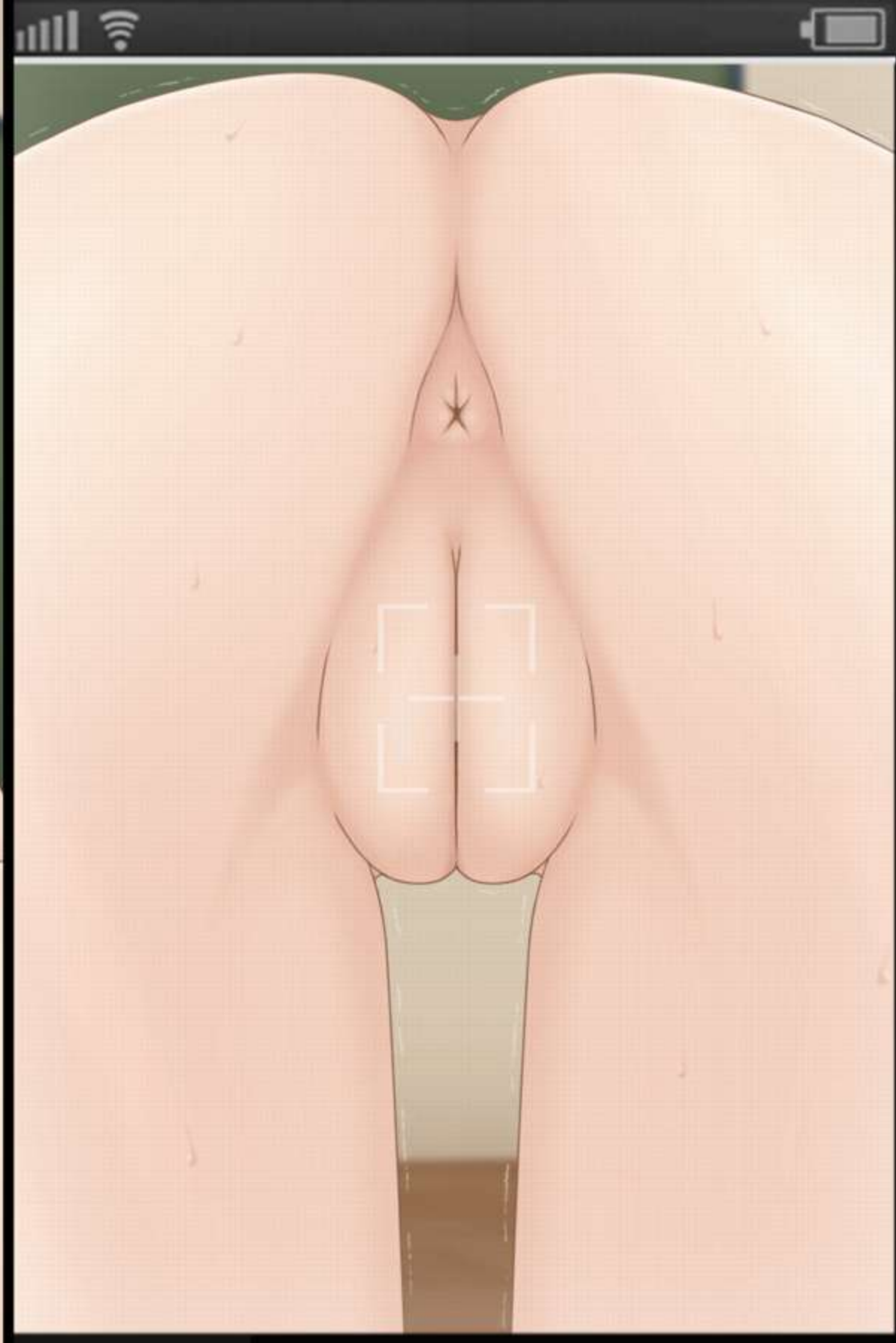












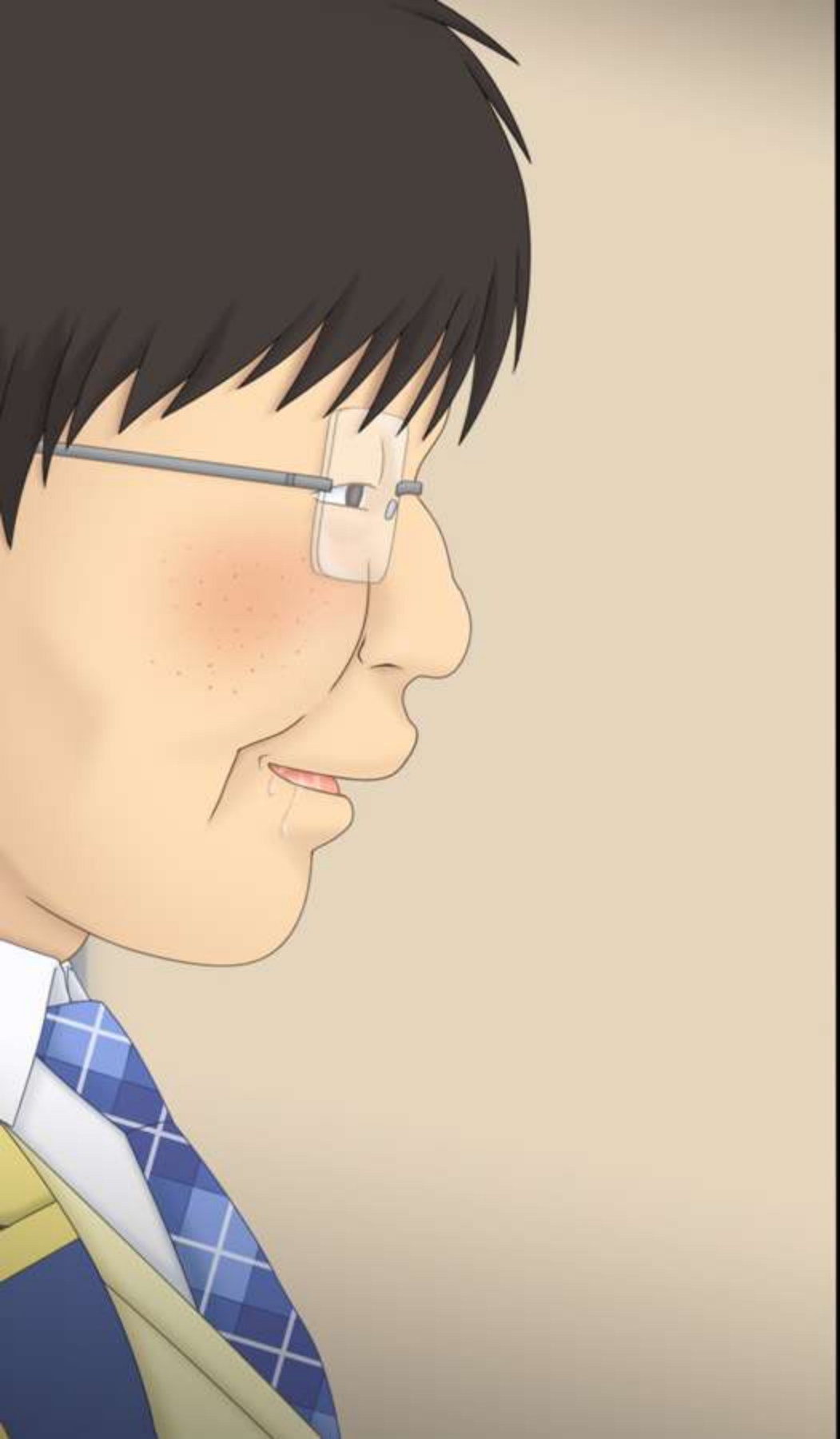














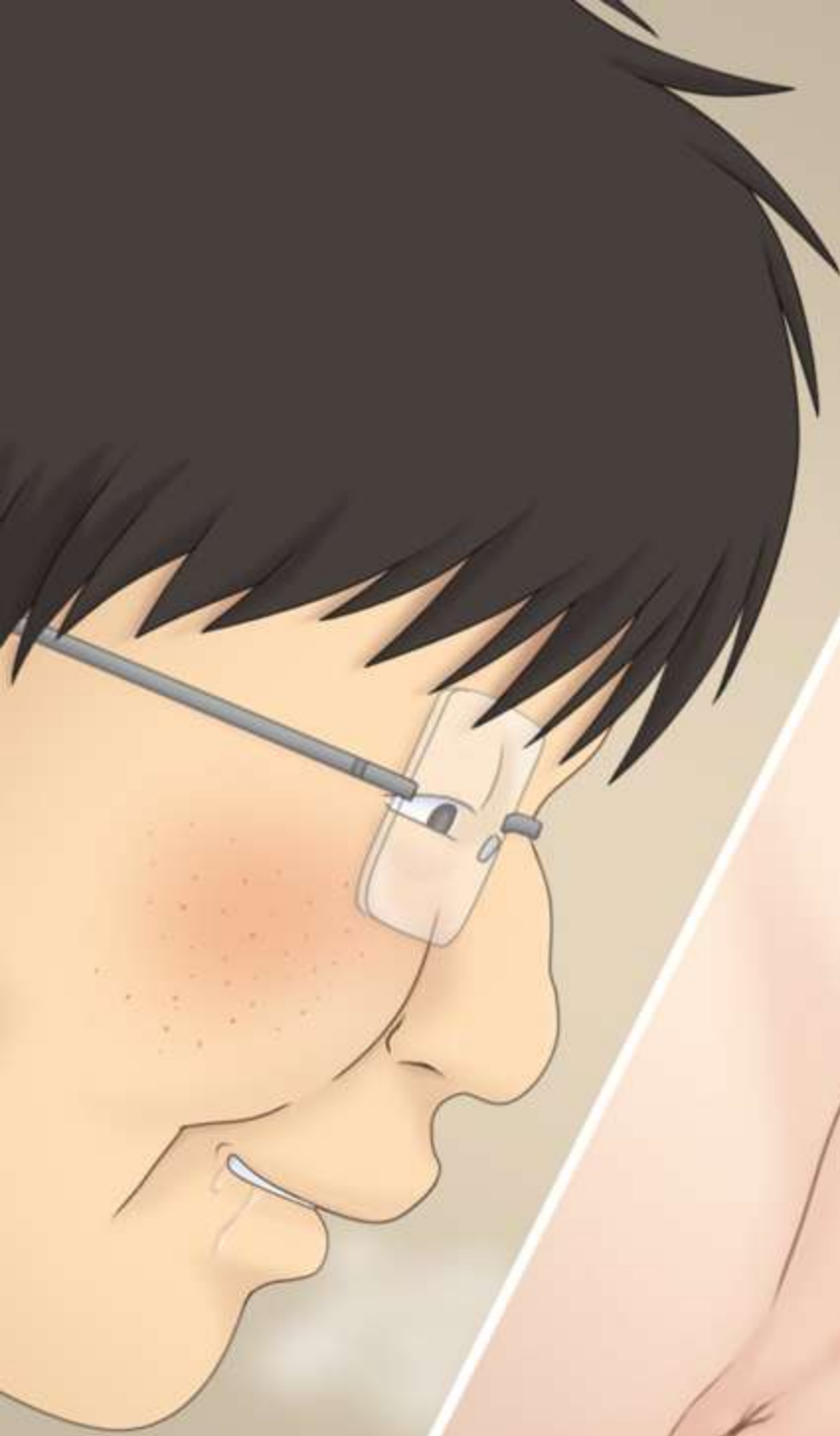






















14/10/28(金) 21:25:42



14/10/28(金) 21:25:39



□ 無題(42)  
14/10/28(金) 21:40:25



□ ぽっくり(18)  
14/10/28(金) 21:45:05



□ アナル(12)  
14/10/28(金) 15:25:39



□ 無題(25)  
14/10/28(金) 21:32:14









無題(42)  
14/10/28(金) 21:40:25



ぱっくり(18)  
14/10/28(金) 21:45:05



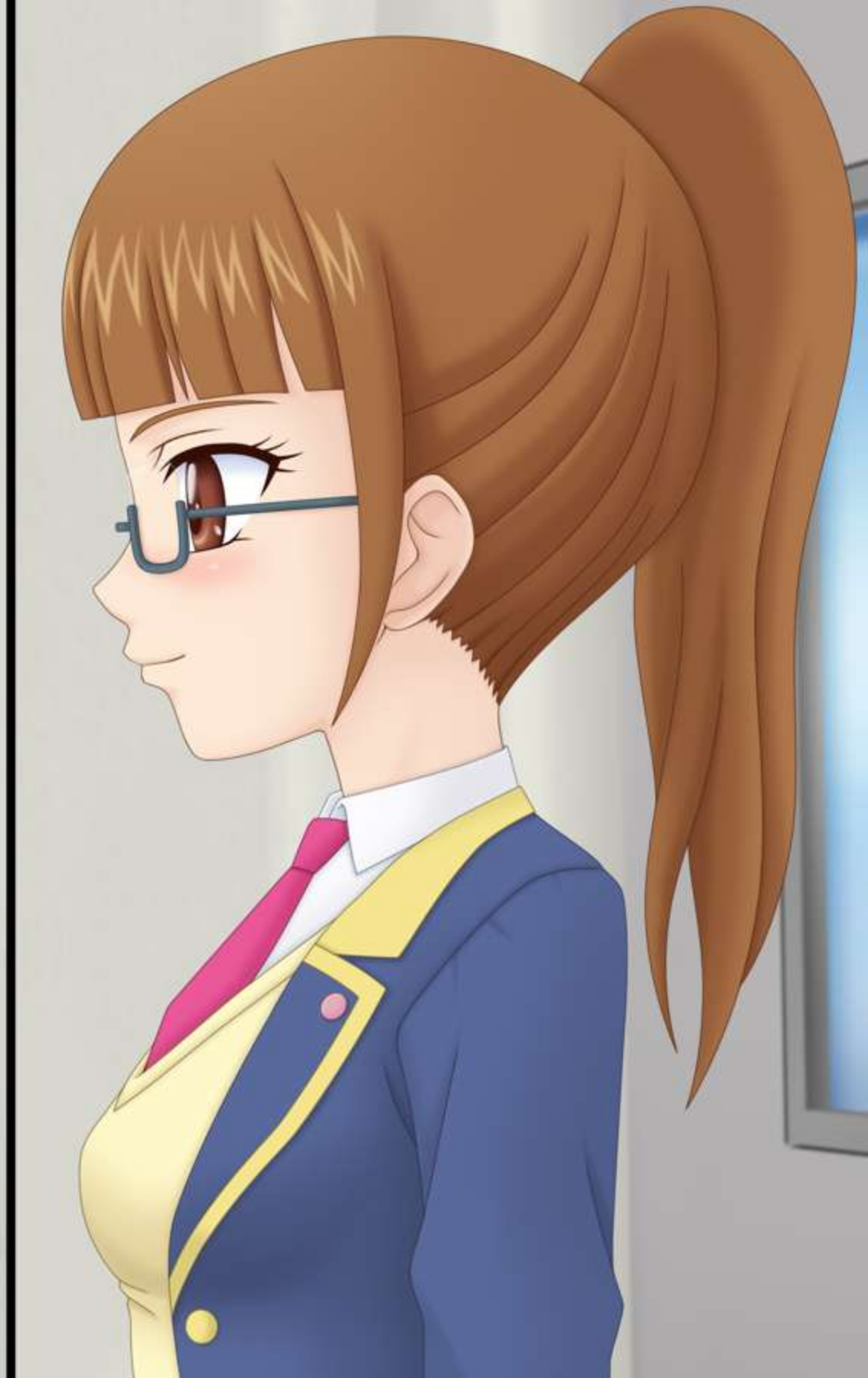
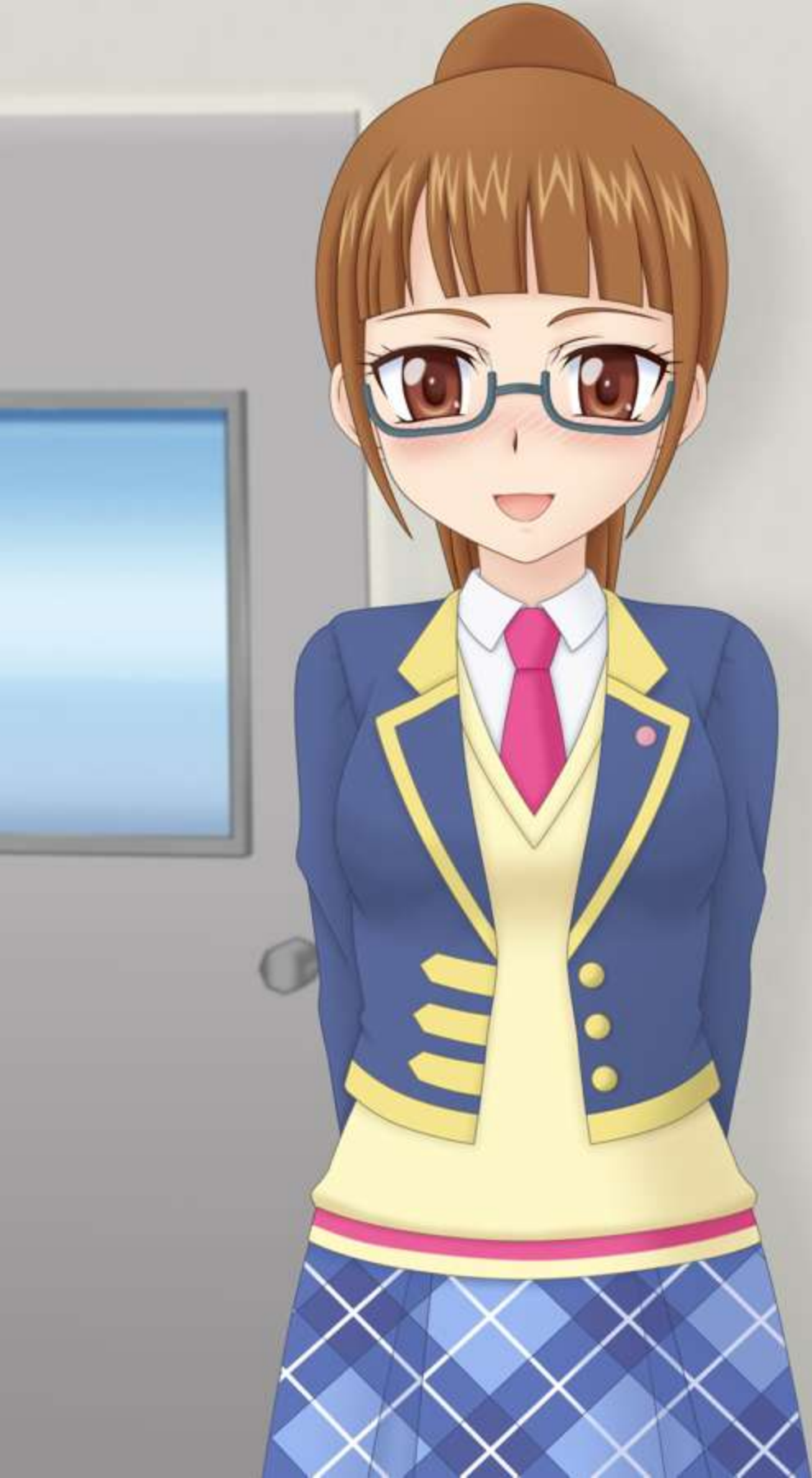
アナル(12)  
14/10/28(金) 15:25:39



無題(25)  
14/10/28(金) 21:32:14

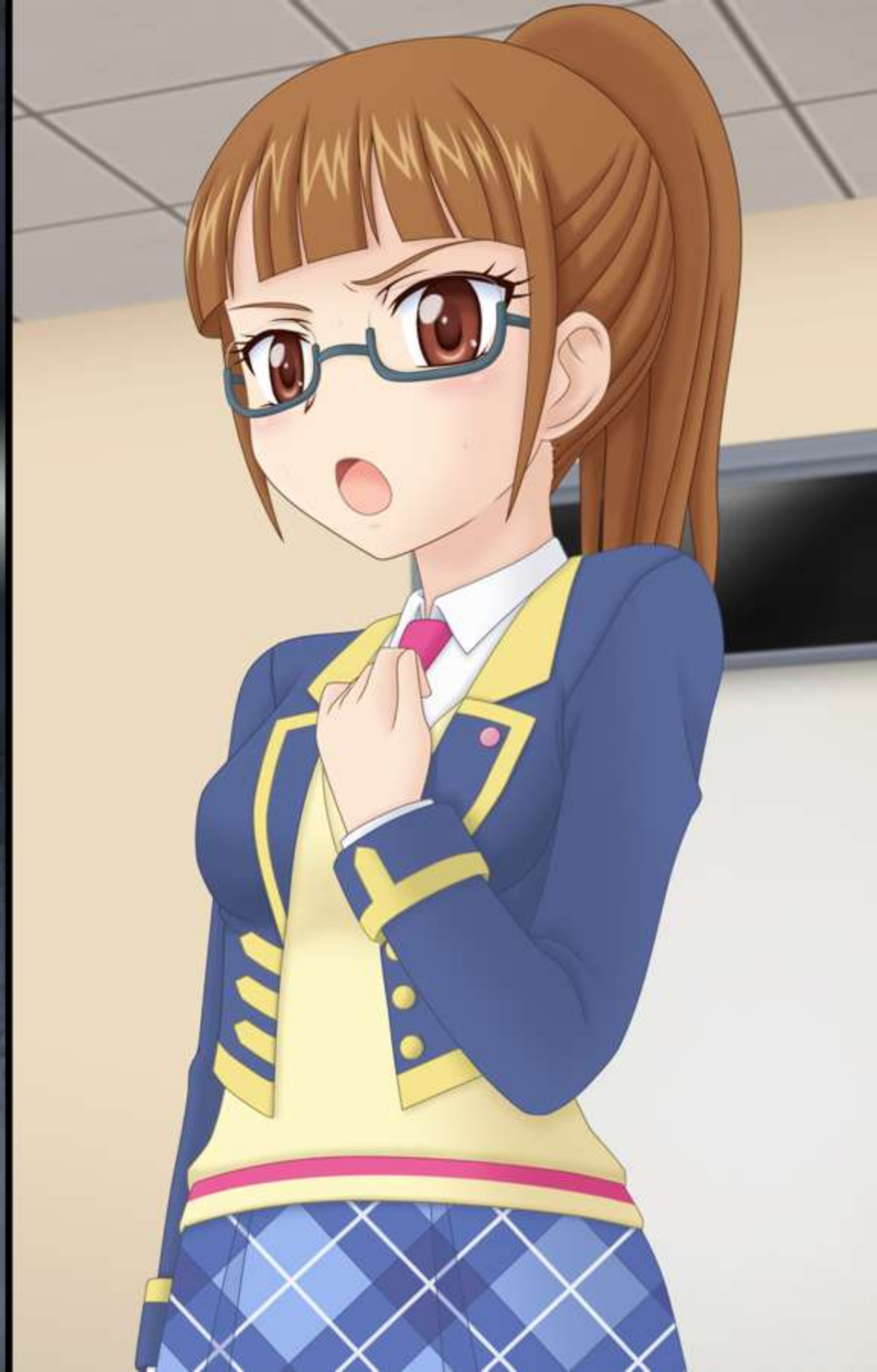








































































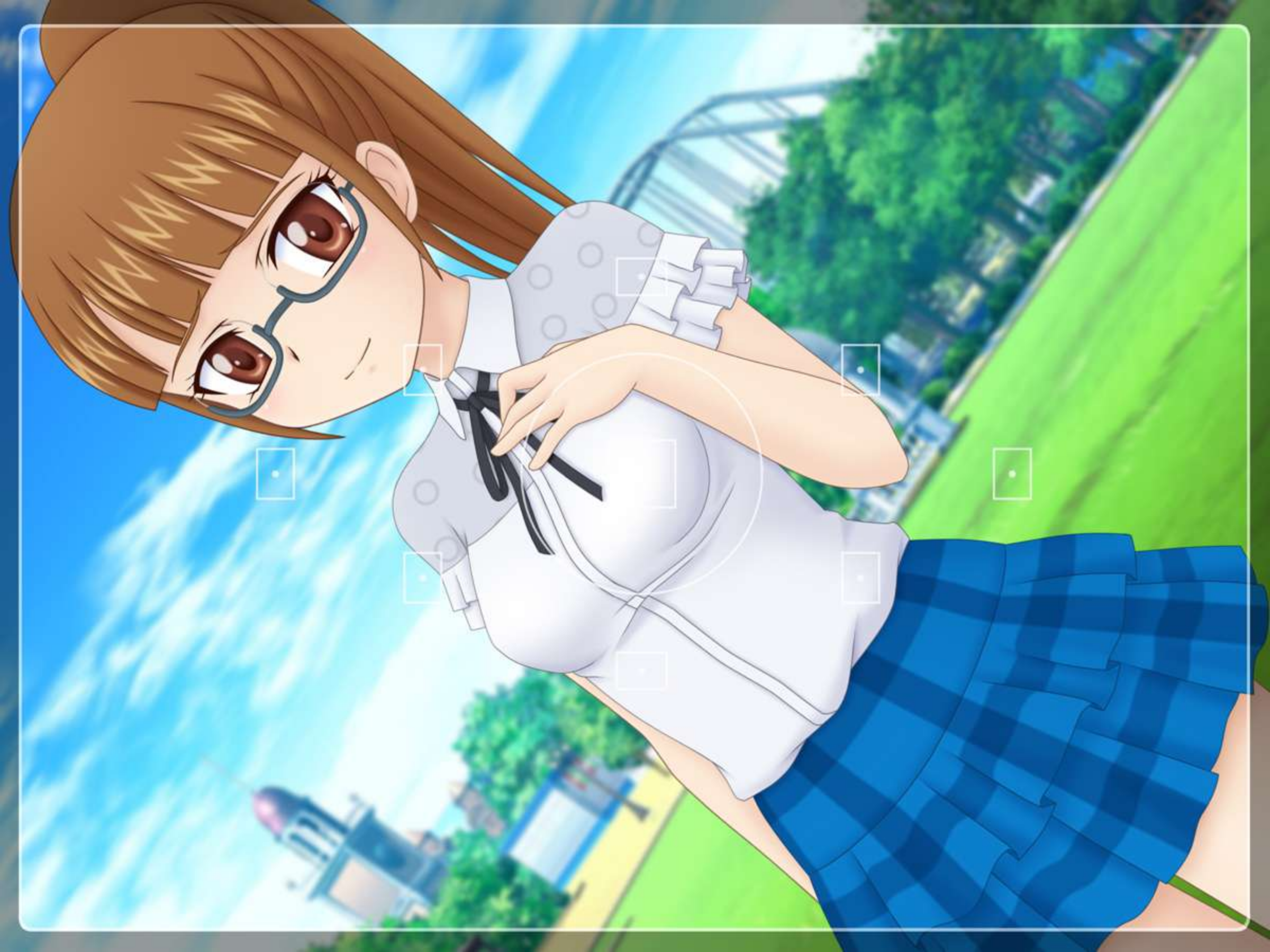


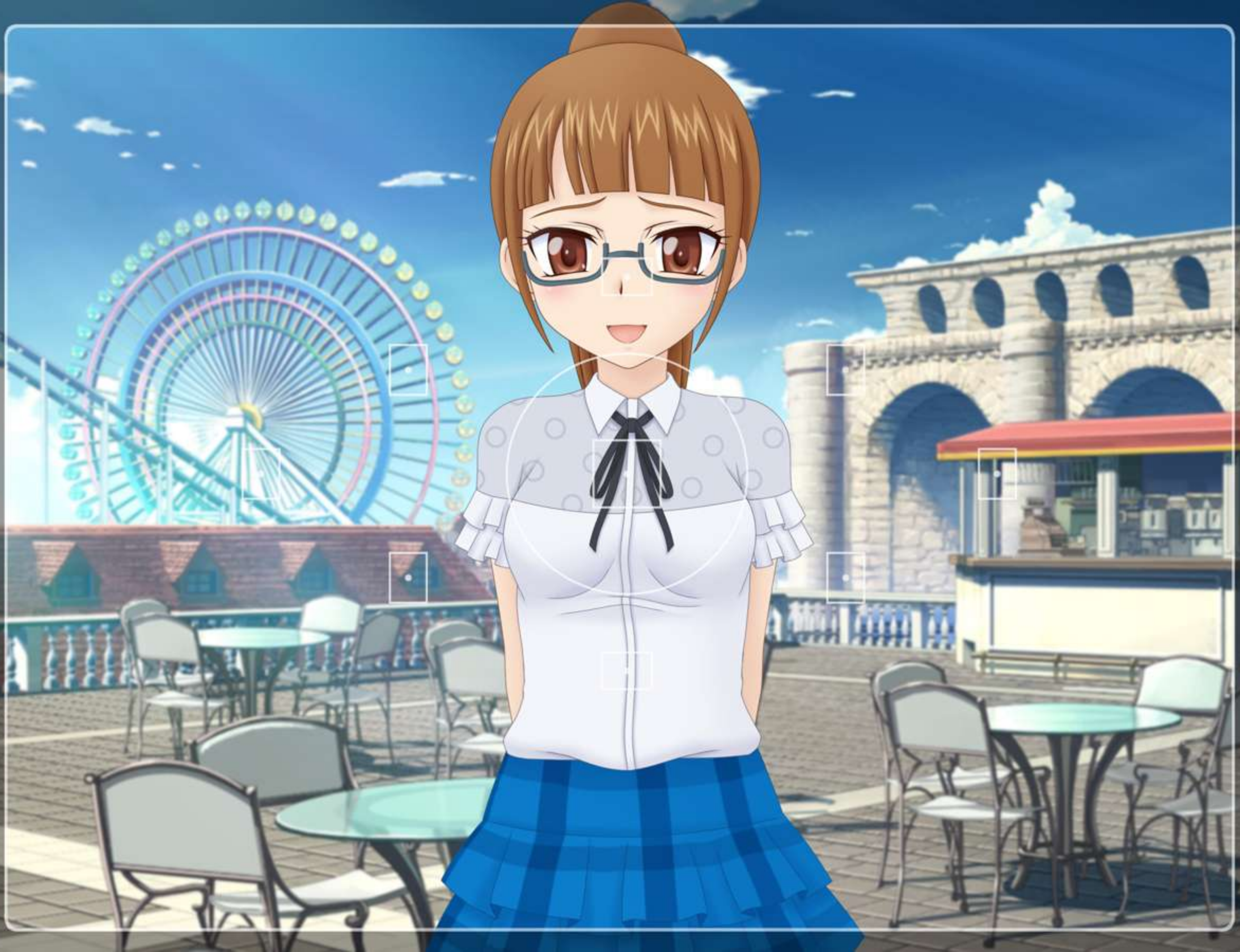


















































HD

● REC







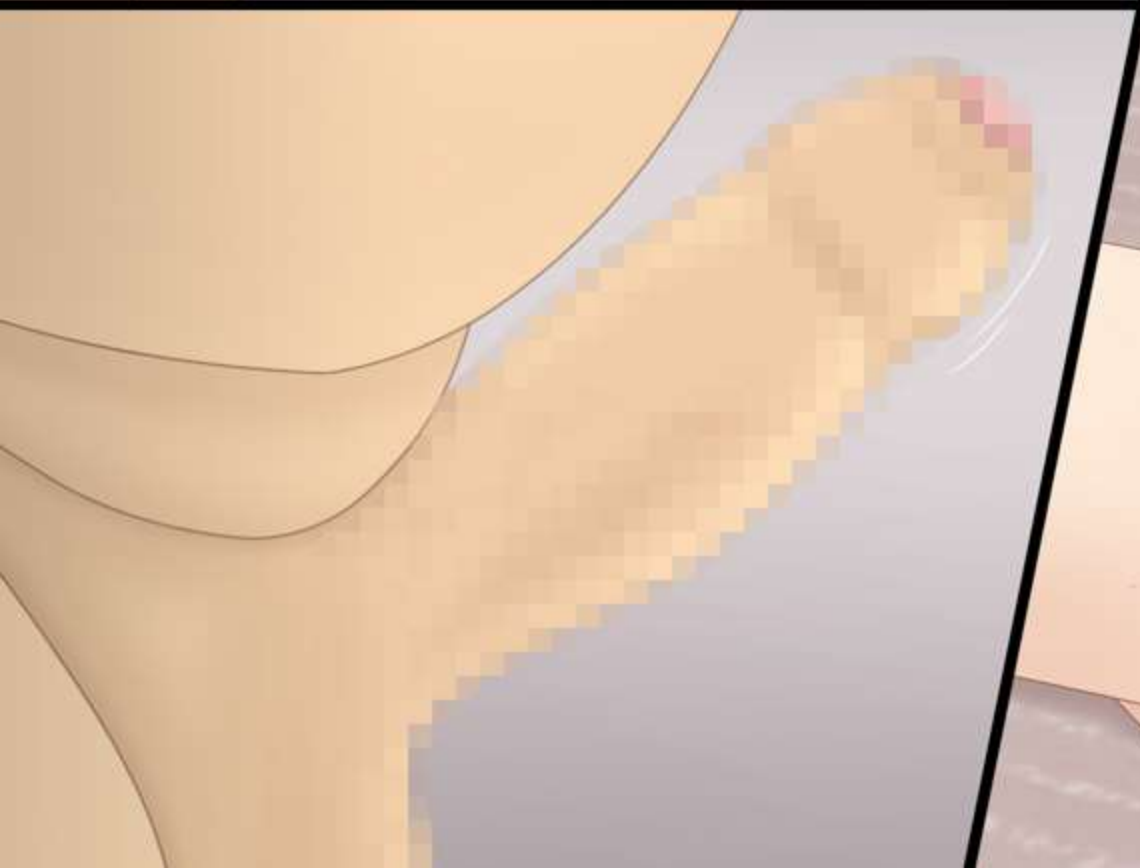
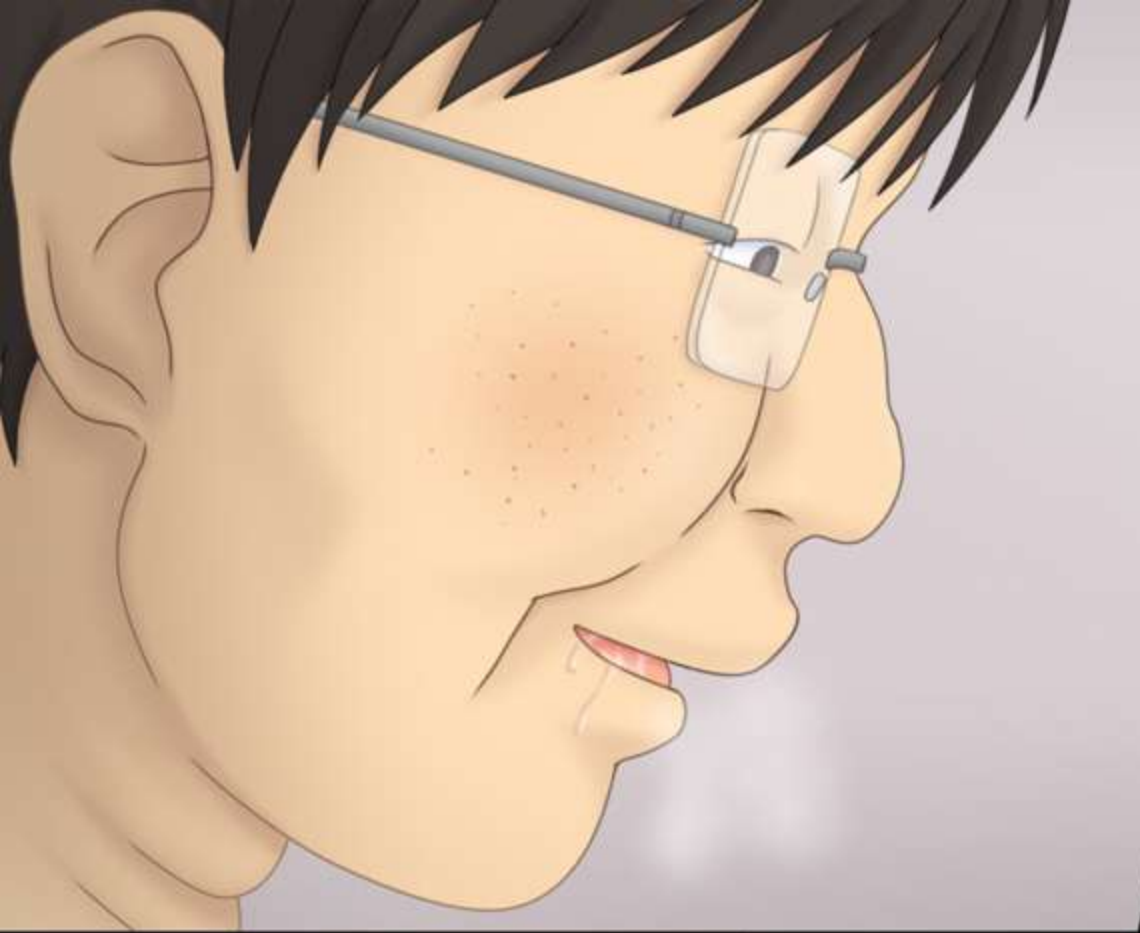
HD

● REC





















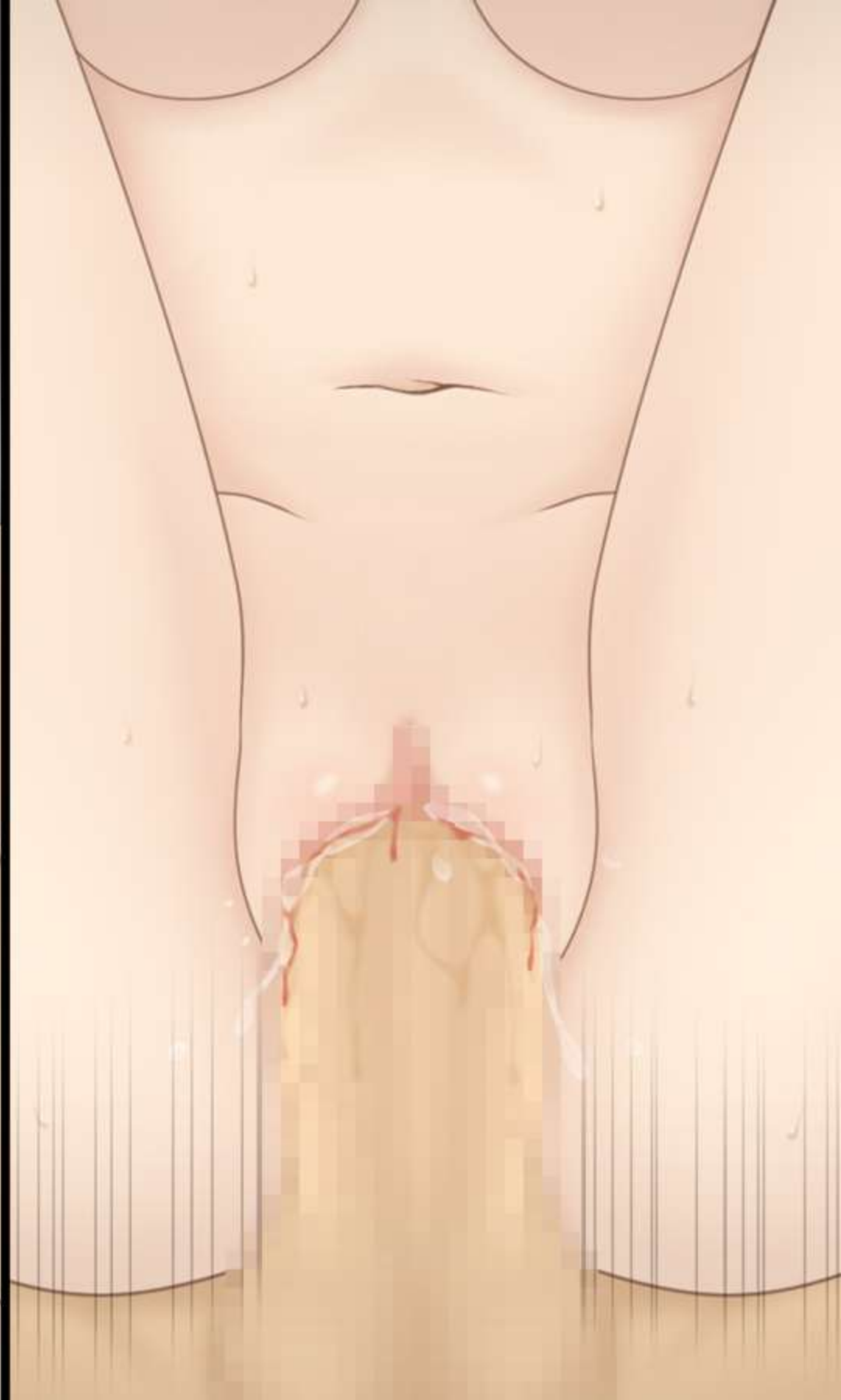


















HD

● REC















HD

● REC





















HD

● REC









HD

● REC



























